



羽場崎遺跡

2005

長野県辰野町教育委員会

県管かんがい排水事業西天竜宮所地区サイホン工事に先立つ緊急発掘調査

羽場崎遺跡発掘調査報告書

2005. 2

長野県辰野町教育委員会

序

上辰野地区の段丘上には、多くの遺跡が確認されています。この段丘はかつて下辰野の長田庄治が、黒曜石製のやじりを20年間にわたって採集した場所であり、さらに昭和2年発行の『郷土』には、大神様付近で採集された石器が紹介されているなど、昔から遺跡の存在が広く知られていた場所である事が『辰野町誌歴史編』にも書かれています。また、町営辰野グラウンド建設の際には、辰野中学校の生徒が中心となって、破壊されてゆく遺跡を調査した事もありました。

遺跡は国民共有の財産として、すべてが保護の対象となっています。この国民のための財産を、安易に破壊していくことは、後世の人々に対してどのように償っても、償いきれない大きな過ちをおかすことにほかなりません。上辰野での今回の一連の調査は、辰野町にとって大変に大きな学術的な成果を提供してくれると考えられます。しかし、それと引き換えに、二度と見られなくなる遺構も存在することを、私たちは忘れてはいけなとと考えています。

開発と遺跡保護の関係は、今までも、そしてこれからも大きな課題となって私たちの前に立ちはだかる事でしょう。現代を生きる我々が、遺跡保護の最良の方法を模索していかなくては、後世の人々に対して責任をとる事ができません。

今回、町道の建設や、西天竜水路のサイフォン改修工事によって破壊されるため、記録保存を行った結果、上辰野地区の遺跡の様相が少しずつ明らかになってきています。この調査で得られた成果を十分に検討し、歴史の1ページとして刻んでいくことが、未来への最大の贈り物となると信じています。

末筆になりましたが、発掘調査に従事して頂いた皆さんにお礼を申し上げ、ごあいさつとします。

辰野町教育委員会
教育長 小林 辰興

例 言

1. この報告書は県営かんがい排水事業西天竜宮所地区サイホン工事に先立って実施された長野県上伊那郡辰野町大字辰野字堀上489番地1他に所在する羽場崎遺跡発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、長野県上伊那地方事務所長と辰野町長の委託契約に基づき、辰野町教育委員会が実施した。
なお、発掘調査の組織については発掘調査関係者名簿として別掲した。
3. 発掘調査は平成15年9月11日から平成16年1月16日まで現場の作業を行い、平成15年9月11日より平成17年2月28日までの間、遺物整理及び報告書の作成を実施した。
4. 発掘現場における記録は福島水が担当し、遺構等の実測図の作成は板倉裕子、大森淑子、早川裕美子が主として行い、遺物等の実測図及びトレースの作成は赤羽弘江、佐藤直子、竹内みどりが行なった。
なお、石器の実測のほとんどを株式会社シン技術コンサルに委託した。また全体測量図、空中写真については株式会社ジャステックに委託した。
石器の図上、1点鎖線は摩耗痕を明確に留める範囲を、破線は稜線を表現している。
5. 調査時及び、整理時に作成した実測図及び写真は、辰野町教育委員会にて保管している。

発掘調査関係者名簿

調査主体者	小林 辰興（辰野町教育委員会教育長）
事務局	有賀 米吉（辰野町教育委員会教育次長）
	三浦 孝美（辰野町教育委員会教育次長補佐兼文化財保護係長）
	福島 永（辰野町教育委員会文化財保護係）発掘調査担当者
発掘調査協力者	板倉 裕子、大森 淑子、工藤 信子、高木 四郎、田中 正子、早川裕美子 丸山 勝好、宮原 榮二、山崎 誠
	整理作業協力者

目 次

序

例 言

第Ⅰ章 遺跡の位置と環境	1
1. 位置と付近の地形・地質	1
2. 歴史的環境	3
第Ⅱ章 調査の経緯と経過	5
1. 保護協議の経過	5
2. 発掘調査の経緯	6
第Ⅲ章 発掘調査	7
1. 調査の方法	7
第Ⅳ章 遺構と遺物	8
1. 土 坑	8
2. 埋 壙	25
3. ピ ッ ト	25
4. 礫 群	25
第Ⅴ章 ま と め	38

写真図版

報告書抄録

挿図目次

第1図	遺跡位置図	2	第18図	ピット実測図	26
第2図	周辺遺跡分布図	4	第19図	埋甕出土遺物	27
第3図	第3号土坑出土遺物	8	第20図	ピット1出土遺物	27
第4図	土坑実測図(1)	9	第21図	礫群出土遺物(1)	28
第5図	土坑実測図(2)	10	第22図	礫群出土遺物(2)	29
第6図	土坑実測図(3)	12	第23図	礫群出土遺物(3)	30
第7図	土坑出土遺物(1)	13	第24図	礫群出土遺物(4)	31
第8図	土坑実測図(4)	14	第25図	礫群出土遺物(5)	32
第9図	土坑実測図(5)	15	第26図	礫群出土遺物(6)	33
第10図	土坑実測図(6)	17	第27図	礫群出土遺物(7)	34
第11図	土坑実測図(7)	18	第28図	礫群・遺構外出土遺物	35
第12図	土坑実測図(8)	20	第29図	遺構外出土遺物	36
第13図	土坑実測図(9)	21	第30図	第8号土坑、遺構外出土遺物	37
第14図	土坑出土遺物(2)	22	第31図	第1層全体測量図	39
第15図	土坑出土遺物(3)	23	第32図	第2層全体測量図	41
第16図	土坑出土遺物(4)	24	第33図	第3層全体測量図	43
第17図	埋甕実測図	25	第34図	第4層全体測量図	45

写真図版目次

図版1	全体写真	図版8	土坑および埋甕
図版2	調査区風景	図版9	土坑出土遺物
図版3	土坑群／土坑(1)	図版10	第3号土坑出土石器・埋甕
図版4	土坑(2)	図版11	土坑および礫群出土石器(1)
図版5	土坑(3)	図版12	礫群出土石器(1)
図版6	土坑(4)	図版13	礫群出土石器(2)
図版7	土坑(5)	図版14	土坑および礫群出土石器(2)

第I章 遺跡の位置と環境

1. 位置と付近の地形・地質

(1) 地 形

辰野町は、南北約70kmの伊那谷の北端部、長野県のほぼ中央部に位置する。また、西を木曾山脈の最北部にあたる経ヶ岳（標高2,296.3m）より連なる標高1,100m以上の6つの山塊が占め、東には伊那山脈の北端部が延びている。伊那山脈は天竜川の支流の一つである沢底川を境として南部は標高700～1,200mの小式部城山塊、北部は標高800～1,000mの東山丘陵に二分されており、辰野町で最もなだらかな丘陵状の山地となっている。

また、大城山山塊は、天竜川と小野川・横川にはさまれた標高750～1,290mの山塊である。山塊の大城山から陣馬ヶ原、鶴ヶ峰と南北方向に延びる主稜部は標高1,100～1,200mの標高差の少ない尾根であるが、主稜部から枝分かれる尾根は北西～南東方向を示すものが多い。また、山塊の東西端には、急斜面や尾根の先端部が三角形を呈する三角末端面が直線的に並び、断層地形を造っている。

一方、諏訪湖に源を発する天竜川は、数段の断層崖に挟まれて、その最低部を南流しており、平出地籍には2～3段の段丘が形成されている。なお、第一段丘面の平出丸山地籍では、昭和38年7月に中期テフラの第3浮石層直下から、長野県天然記念物の原牛の臼歯12枚が発見されている。これらの段丘の山麓部には扇状地の発達が目立ち、特に楡沢山～桑沢山麓では複合扇状地が形成されている。大城山山麓には甘露井集落の乗っている松葉沢扇状地や、堀上の西天竜水路サイフォン上の大洞沢扇状地が存在し、その北西部には寺林扇状地が存在する。これらの扇状地は新期テフラをおおっているため、新しい扇状地と考えられる。また、七倉の沢では扇状地を支える台地がなかったため、扇状地が形成されていない。

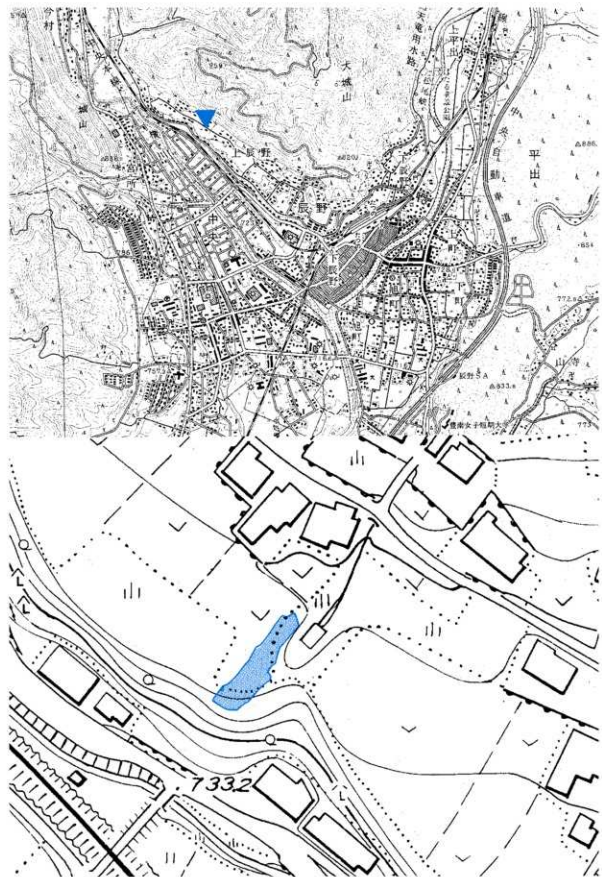
(2) 地 質

長野県はその中央部に日本を代表する大断層である糸魚川～静岡構造線がはしり、その東部にフォッサマグナが存在している。また、南部には中央構造線が東西に縦走し、地質学的には非常に複雑な構造を呈している。辰野町はこれらの構造線に近い地点に位置し、地質的には西南日本内帯の東端部にあたる。このため、赤石山脈は辰野町南部で途切れ、木曾山脈の花崗岩についても辰野付近で途切れている。

辰野地域は大陸縁辺部で形成された堆積岩を基層とし、大城山付近ではその上部に、中生代層であるチャートをよく挟む火山泥流堆積物の横川層がのり、その上層に辰野町の南方から流入してきた唐沢礫層が覆い、さらにその上層に鮮新世末～更新世にかけての火山噴出物である塩嶺累層がのり、現在の基層がきづかれた。その上にチャート・結核岩・砂岩などの礫や砂などからなる横川川層と呼ばれる砂礫層が堆積し、御岳の新期テフラに覆われている。

また、羽場崎遺跡の存在する大城山山麓にも西部断層と呼ばれる断層が存在し、南部から堀上付近をとおり、東へカーブして上平出付近（湖北衛生センター付近）に伸びていると考えられている。

なお、横川川や、小横川は、奈良井川と同様に北に向かって流れる川であったものが、断層が動いたために南流するようになった様子が伺える。このため、権兵衛峠～経ヶ岳～牛首峠の連なりが南北分水界となり、これより北部は千曲川水系として日本海へと流れ込み、南部は天竜川水系として太平洋へと注ぎ込んでいる。



第1図 遺跡位置図

2. 歴史的環境

段丘の全面にわたって遺跡が広がっている上辰野地区は、明治25(1893)年に東京から訪れた柳田半古に影響を受けた長田庄治が、石鎌を20年間にわたって採集を続けた丸山遺跡(116)が存在し、古くから遺跡として広く知られていた地域である。この丸山遺跡は、昭和26(1951)年に町営辰野球場(通称丸山球場)の造成中に縄文時代前期の住居址が12基発見され、同時に黒浜式・諸磯a式・諸磯b式等の各型式や、北白川下層式の土器も採集されている。

また、平成6(1994)年3月14日～3月25日には、住宅団地造成に伴い、堀上遺跡(110)の約420㎡を試掘調査しているが、内耳土器片を中心にして、縄文時代後期の土器片等が出土したものの、遺構は把握されなかったため、試掘のみで調査は終了している。

平成8(1996)年12月2日～平成9年3月14日には中道線の南東端部にあたる丸山下遺跡(115)の本調査(約150㎡)が行われ、縄文時代前期の住居址1基をはじめ、土坑等が出土した。住居址については、遺跡分布範囲の南東端部に相当することや、遺跡中心部と考えられる地点から住居址が検出されない事等を考えると、この住居址は丸山遺跡で発見された集落の北端部に当たる地点と考えることができよう。なお、平成10(1998)年4月15日～4月27日には、その延長線上について丸山下遺跡の試掘調査を実施(約16㎡)したが、この時には遺構等が検出されていない。

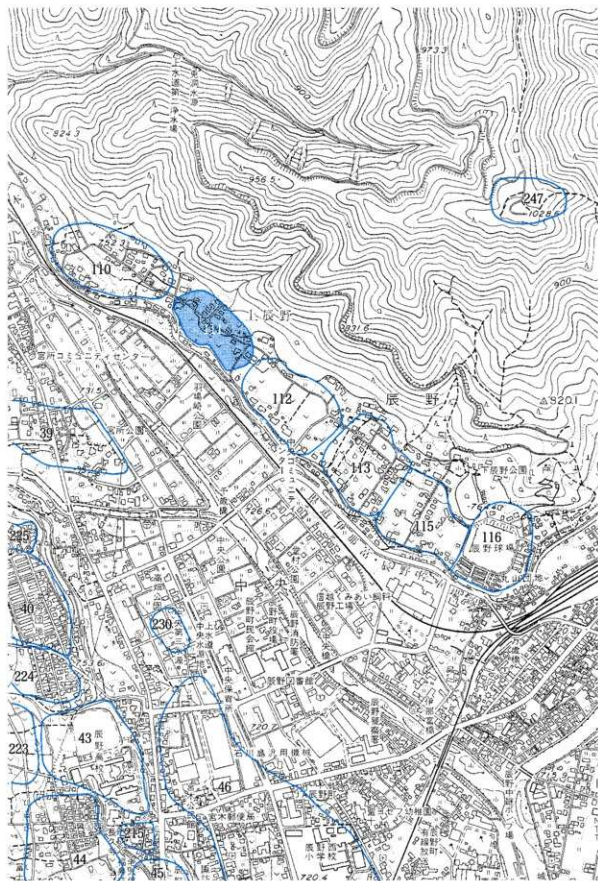
平成13(2001)年～平成14(2002)年には、中道線の建設が本格的に実施されるのに伴って、丸山下・甘露井・堂村遺跡が調査された。この調査によって、丸山下遺跡からは縄文時代中期初頭の土器を伴う土坑が出土している。

また、甘露井遺跡からは、中期初頭の土器や、人頭大の礫が入れ込まれた土坑が出土しており、中でも第7号土坑は一辺1mにもなるような大型の礫が多量に押し込まれた状況で出土し、他の土坑の検出状況と合わせて考えても、この一帯が墓域の可能性が高まっている。

さらに、堂村遺跡からは遺存状況は良くないものの、平安時代の住居址や縄文時代中期初頭の埋燗炉の設置された住居址、竪穴等が出土した。

堂村遺跡からは他にも排土内ではあるが、調査区北西地点から中国陶磁器の染め付けの碗が出土している。このことは、羽場崎遺跡から美濃瀬戸系の灰軸陶器片を伴う竪穴建物址が出土していることや、古屋敷地名の存在と合わせて、中世の遺構の存在を想定させる。

遺跡番号	遺跡名	時代				出土遺物	出土遺構
		縄文	古墳	平安	中世		
110	堀上遺跡	○			○	内耳土器	
111	羽場崎遺跡	○			○	縄文土器、陶磁器	住居址、竪穴建物址他
112	堂村遺跡	○			○	縄文土器、染め付け碗	住居址、土坑等
113	甘露井遺跡	○	○	○		縄文土器	土坑
115	丸山下遺跡	○		○		縄文土器	住居址、土坑
116	丸山遺跡	○				縄文土器	住居址
247	大城山遺跡				○		山城



第2図 周辺遺跡分布図

第Ⅱ章 調査の経緯と経過

1. 保護協議の経過

上辰野地区は今回の調査が実施されるまでに、数回調査が実施されている。しかし、羽場崎遺跡については調査経歴もなく、詳細については明らかでなかった。

平成7年にこの段丘上に町道中道線の建設計画が具体的になり、平成8年度には丸山下遺跡が発掘調査され、縄文時代前期の住居址等が検出されている。さらに平成13年度にはその先線の建設計画が具体的になり、平成12年度から試掘調査を実施し、遺跡の内容を把握しながら本調査を実施していった。

平成14年には、当初の建設計画予定地でなかった羽場崎遺跡についても調査依頼があり、試掘調査を実施しないまま本調査を実施することになった。

しかし、平成14年9月から表土を除去しはじめたところ、おびたしい礫が検出され、縄文時代後期の土器片も多量に出土したことから、当初の工事実施年度までには調査を終了することが不可能となった。このため、関係各課と保護協議を実施することとなり、平成15年7月7日に辰野町民会館で協議を実施した。

その協議上、中道線の建設と抱き合わせる形で、西天竜水路のサイフォンの改修工事が予定されている事が明らかとなった。このため、町道建設よりも、このサイフォン改修に対しての保護協議が最優先されることとなり、同日午後には伊那地方事務所土地改良課、辰野町役場農政課、辰野町教育委員会が保護協議を実施した。

この協議上で、サイフォン工事については平成11年より計画があり、当初は既存のサイフォン地点に新設する予定であったが、水田耕作用の用水路であることから、水を止める期間が2カ月程度しか確保できないため、工事期間が短すぎることから、平成13年度に設計を変更し、隣接地に新設することとしたことが明らかとなった。また、この設計にもとづいてすでに工事を実施していることが明らかとなった。このため、町教育委員会ではこの地点が遺跡であり、破壊されることが明白なため、発掘調査を実施して記録保存する必要がある事を説明した。

平成14年7月23日には長野県教育委員会の上田指導主事をまじえて3者協議を実施した。その席で、平成15年の秋にはサイフォン工事を実施しないと、計画されている事業年度で事業が完了しないことが判明した。また、作業工程上、町道建設予定地で、この時点ですでに発掘調査中の地点に、170tクレーンを設置して資材を吊り上げる計画であり、サイフォン工事の開始予定時期には調査が完了する見込がなかったため、発掘調査と、工事の工程そのものについても見直しが必要な事態となった。このため、調査工程と、事業工程の双方で調整を行い、再度協議を実施することとなった。

8月6日に再度3者での保護協議を実施した。この席上で開発側からはクレーンを設置しての従来の方法では工事が不可能なため、段丘下の170tクレーンで吊り上げられる所まで資材を持ち上げ、その先は人力で行う。作業工程はできるだけ圧縮し、一部昼夜工事にするとの説明があった。一方教育委員会としては、やはり従来の事業工程に合わせるため、第Ⅰ調査区の調査を実施しても、期間的には終了しない見込みのため、第Ⅱ調査区の調査の最終面を残して一時中断し、そこを資材及び機材の設置場所として使用してもらおうような段取りを提示した。このような開発側の大幅な工程の見直しによって、発掘調査の期間を確保するにいたり、委託契約を伊那地方事務所と締結し、調査を開始した。

なお、この調査については、文化庁より農家負担分の補助金をえて実施した調査であるが、補助金分を差し引いた、農家負担分については文化財保護部局で負担するとの文化庁と農水省との申し合わせについて、文化財保護部局とはどこを指すのかについて問題となった。

西天竜水路は辰野町、箕輪町、南箕輪村、伊那市の4市町村に渡って農業用水を供給しており、そのためのサイフォンを新設する工事である。発掘調査はその緊急性から、辰野町教育委員会で工事に支障が出ないよう最も優先で実施したものの、辰野町教育委員会に限らず、受益者の所在する文化財保護部局なら保護措置を実施出来る状況と考え、さらに他市町村の住民分まで、農家負担分を負担するのは適当ではないと考える辰野町教育委員会に対して、他市町村は辰野町で負担するのが相当との考え方を示した。受益者が複数の自治体に渡っている場合の費用負担について大きな見解の相違を見たのは誠に遺憾であった。

最終的には辰野町教育委員会で費用の負担をした結果となったが、緊急という理由で、しかも期限の迫っている町単独の調査への影響も覚悟の上でこの調査に3カ月を費やし、さらに辰野町の貴重な文化財の破壊を余儀なくされ、その上費用まで全額負担するといった状況について、今後十分な論議を重ねていかなくてはならないと考える。

発掘調査の経緯（調査日誌より）

9月11日（木） 晴れ 重機による表土除去。遺構検出作業	12月4日（木） 晴れ 確認測量。遺構面掘り下げ。集石写真撮影。
9月12日（金） 晴れ 礎群検出作業。	12月16日（火） 晴れ 確認測量。遺構面掘り下げ。
9月30日（火） 晴れ 礎検出作業。礎レベル取り込み。	12月18日（木） 晴れ 確認測量。土坑（第1号～第3号）調査。集石・土坑断面図作成。
10月3日（金） 晴れ 礎検出作業。測量基準点設置。	12月19日（金） 曇のち雪 確認測量。第7号～第10号土坑断面図作成。集石掘り下げ。
10月6日（月） 晴れ 礎検出作業。礎平面図作成。	12月24日（木） 晴れ 全体測量図作成。土坑（第7号～第10号）掘り下げ。
10月10日（金） 晴れ 礎（西部地区）写真。礎検出作業。	12月25日（木） 晴れ 確認測量。土坑断面図作成。確認測量。
10月17日（金） 晴れ 調査区景観写真空撮。図化用写真撮影。	1月7日（水） 晴れ 土坑（第12号～第15号）掘り下げ。第5号集石調査。土坑・集石断面図作成。
10月20日（木） 晴れ 礎群単点取り込み。	1月9日（金） 晴れ ルームマウンダウン写真撮影。土坑調査及び平面図作成。
10月30日（木） 晴れ 礎群測量図補測。	1月14日（水） 晴れ 土坑（第12号・第21号・第22号土坑）調査及び測量。全体写真撮影準備。
11月18日（火） 晴れ 礎下端単点取り込み。	1月15日（木） 晴れ 全体写真撮影
11月19日（水） 晴れ 礎下端単点取り込み。サブトレンチ開坑。土坑半截。	1月16日（木） 晴れ 土坑測量。調査終了。
12月2日（火） 晴れ 礎群全体写真。土坑写真撮影。	
12月3日（水） 礎測量。土坑平板測量・レベル取り込み。	

第三章 発掘調査

1. 調査の方法

上辰野地区は大きな開発が少なく、開発事業に伴う遺跡の破壊はあまりなかった。このため、調査事例が少なく、遺跡の様相もはっきりしていなかった。今回サイフォン工事に先立って実施している、町道中道線に伴う発掘調査で、羽場崎遺跡の様子はある程度把握していた。このため、調査対象面積が約200㎡と狭い事もあり、試掘調査をせずに本調査を実施することとした。

発掘調査は、まず、多量の礫の出土が予想されていたため、バックホーで礫出土直上の深度まで掘り下げ、以下を手作業によって掘り進めた。バックホーによる掘削時にはジョレン等を使用して整地し、礫が検出された時点で移植ゴテや、手草カキ等を使って掘り下げを実施している。礫が検出された時点で図化用写真撮影を行い、現地で撮影された写真上に補測を加えた。補測が終了した時点で、トータルステーションを使用して礫の上端・下端の単点を取り込んでいる。これらの作業が終了した後、再度掘り下げを行い下層の礫の検出を行っている。

第2層の礫が検出された段階で、礫の測量を、トータルステーションを使って実施し、素図が出来上がった段階でやはりトータルステーションを使用して単点の取り込みを行っている。

礫の調査が終了した段階で、移植ゴテ等を使用して土坑等の検出作業に入り、検出された時点で遺構内を掘り進めた。遺構検出後は、土坑等については半割し、土層の観察に努めた。

遺構が掘り上がった段階で、事前に設定しておいた基準杭にしたがって簡易遺り方測量による1/20の平面図及びトータルステーションによる1/100の全体測量図の作成を行うと共に、産業用ラジコンヘリコプターによる全体写真を撮影した。

なお、調査区の設定は、国土交通省国土地理院の旧測量法による日本測地系・平面直角座標系第Ⅱ系を基点とし、基準メッシュ図の区画については国土基本図（1：50,000大縮尺地形図）の区画に準じた。なお、調査地区内は10mメッシュを基準として設定している。標高については、業者によってあらかじめ調査区内に設定されたベンチマークを使用した。

遺物の取り上げは遺構検出作業ではグリッドで、遺構内の遺物については各遺構別に取り上げ、一部は層位別に取り上げている。また、必要に応じて適宜出土位置や、出土レベルを記録し、図化や写真撮影を行ったものもある。

遺物の整理段階では遺物台帳を作成し、各遺物には出土遺跡名（略称：HBZ）と遺物番号、場合により遺構名、層位等も註記した。なお通常の註記の際には略称の後に調査次を追記するが、今回は複数の調査区域を同時に調査する事になってしまったため、混同しないための措置として、西天地区を第Ⅲ調査区とし、特例として略称の後に調査区を註記（HBZ-Ⅲ）している。

現場での写真撮影には一眼レフカメラを2台使用し、モノクロームネガフィルムとカラーポジフィルムで記録した。また、出土遺物の撮影には6×7モノクロームネガフィルムおよび6×7カラーポジフィルムを使用した。

第IV章 遺構と遺物

1. 土 坑

第1号土坑（第4図）

Kc08 13-11 Bf-44付近より出土している。平面はやや西部に膨らみを持つ円形で、直径約52cmを測る。深さは約68cmで、断面はやや不整形な円筒状である。覆土は全体的に黄色味を帯びた褐色を呈する。

遺 物

第16図1～3が出土している。いずれも縄文が施文されている。縄文時代後期と考えられる。

第2号土坑（第4図）

Kc08 13-11 Bc-43付近より出土している。平面形態は推定で約1.3m×1mの楕円形を呈し、深さは約44cmを測る断面碗状の土坑である。覆土は全体的に黄色味を帯びた褐色を呈する。なお、この土坑は第3号土坑と重複して検出されており、破片が出土しているのみである。

遺 物

第16図4～8が出土している。中期後葉（7）と、後期の土器が混在していると考えられる。

第3号土坑（第4図）

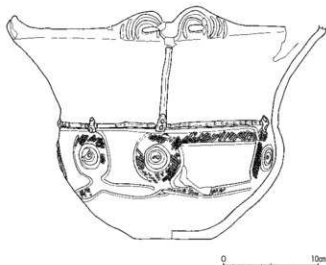
Kc08 13-11 Bd-43付近より出土している。直径約1m、深さ約40cmを測り、底部付近からは伏せた状態で深鉢がほぼ完形で出土している。この土坑は第2号土坑と重複して出土していると考えられるが、重複関係を遺構検出作業中に把握できず、正確な土層観察ができていないため、前後関係等は明確にできない。

遺 物

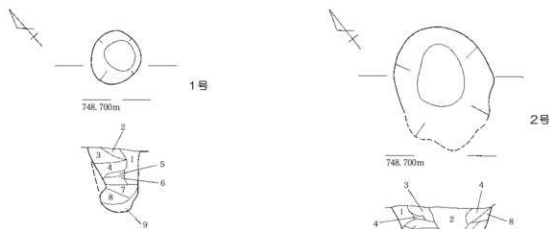
第3図が出土した遺物である。口径34cm、高さ22cmを測る。口縁部に4箇所の波状突起を持ち、体部に磨消縄文による渦巻き文が施文されているが、磨耗によって痕跡程度しか残されていない箇所もある。焼成は良好で、器壁は比較的薄く作られている。縄文時代後期前葉堀ノ内式期と考えられる。

第4号土坑（第5図）

Kc08 13-11 Be-42付近より出土している。直径約1mの平面円形で、深さ約40cmの、断面袋状を呈している。覆土は黄色土の混入した暗黄褐色が主体を占める。また、覆土中層付近では一辺10cmほどの偏平な罌が出土している。

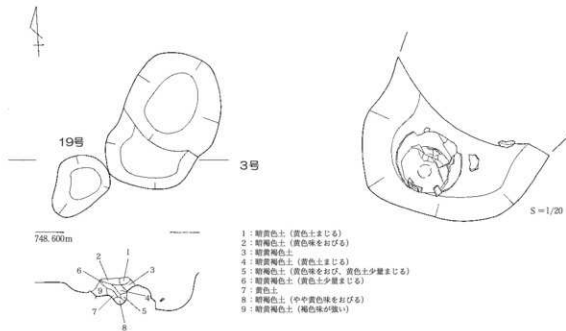


第3図 第3号土坑出土遺物



- 1 : カクラン (暗褐色土石まじる)
 2 : 暗褐色土 (黄土ややまじる)
 3 : 暗褐色土 (やや黄色味をおび、黄土まじる)
 4 : 暗褐色土 (やや黄色味をおび、黄土ややまじる)
 5 : 暗褐色土 (やや黄色味をおび、黄土まじる)
 6 : 暗褐色土 (やや黄色味をおびる)
 7 : 暗褐色土 (やや黄色味をおび、石少量まじる)
 8 : 暗褐色土 (暗褐色土まじる)
 9 : 暗褐色土 (褐色味をおびる)

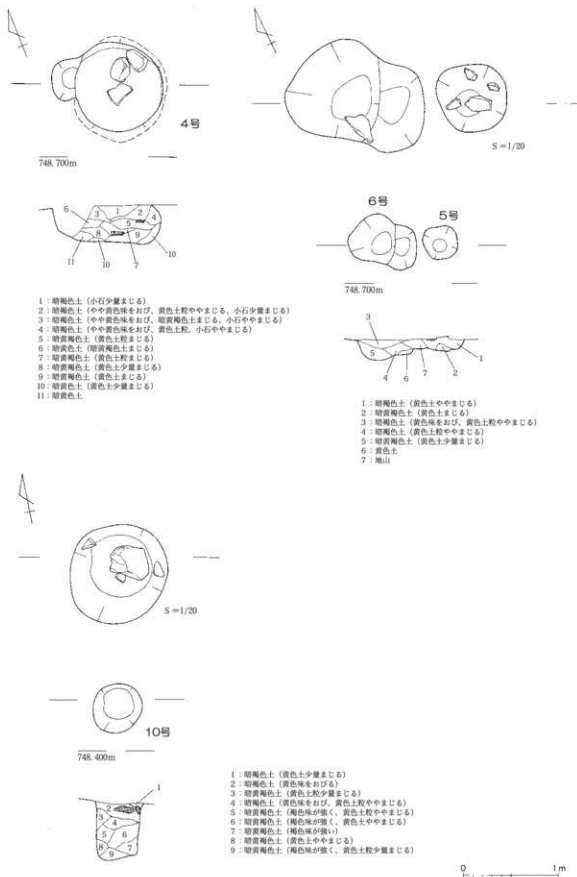
- 1 : カクラン (黒色土) 小石まじる
 2 : カクラン (暗褐色土)
 3 : 暗褐色土 (褐色味が強い)
 4 : 暗褐色土 (黄土まじる)
 5 : 暗褐色土 (黄土味をおびる)
 6 : 暗褐色土 (黄土味をおび、黄土少量まじる)
 7 : 暗褐色土 (黄土粒まじる)
 8 : 暗褐色土 (黄土土まじる)
 9 : 暗褐色土 (黄土土少量まじる)
 10 : 黄土 (暗褐色土まじる)
 11 : 黄土



- 1 : 暗褐色土 (黄土土まじる)
 2 : 暗褐色土 (黄土味をおびる)
 3 : 暗褐色土
 4 : 暗褐色土 (黄土土まじる)
 5 : 暗褐色土 (黄土味をおび、黄土土少量まじる)
 6 : 暗褐色土 (黄土土少量まじる)
 7 : 黄土
 8 : 暗褐色土 (やや黄色味をおびる)
 9 : 暗褐色土 (褐色味が強い)

0 1m

第4図 土坑実測図(1)



第5図 土坑実測図(2)

遺 物

第16図9～17が出土している。9・10は唐草文系の土器であり、11～16は後期の土器と考えられる。縄文時代後期前葉と考えられる。

第5号土坑（第5図）

Kc08 13-11 Bd-41付近より出土している。直径40cm、深さは14cmと浅い。

遺 物

第14図1が唯一出土している。磨石である。

第6号土坑（第5図）

Kc08 13-11 Bd-42付近より出土している。当初は1基と考えていたが掘り方から推定すると、2基の可能性が高い。土坑全体の規模としては長径74cm、短径50cm、深さ20cmを測る。

遺 物

遺物は出土していない。

第7号土坑（第6図）

Kc08 13-11 Bc-41付近より出土している。この付近には土坑やピットが集中して出土している。

土坑は直径約64cmの平面円形で、深さ約70cmの断面円筒形を呈している。覆土は黄色土が混入する暗褐色土が主体を占める。土坑上層には拳大の礫が数個集中しておかれており、当初は集石として番号を付けていた。

遺 物

第16図18が出土している。深鉢の体部で、磨消縄文が施文され、沈線脇には交互刺突文もみられる。後期前葉の土器である。

第8号土坑（第6図）

Kc08 13-11 Bd-41付近より出土している。直径約90cmの平面やや不整形な円形で、深さ約56cmを測る断面不整形な土坑である。

遺 物

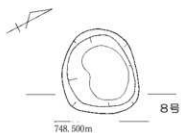
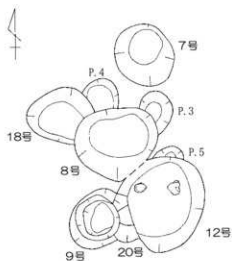
第16図19～26が出土している。21は唐草文系の土器片である。23～25は後期初頭の土器片である。第30図1は黒曜石製の楔形石器である。

第9号土坑（第8図）

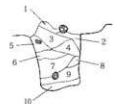
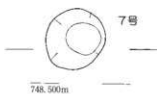
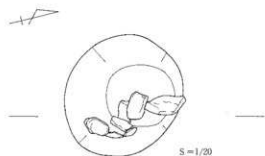
Kc08 13-11 Bd-41付近より出土している。直径約64cmを測る平面円形の土坑で、深さは約74cmを測る断面円筒形を呈する。覆土は黄色味をおびるか、黄色土が混入した暗褐色土が主体であった。この土坑も上層から礫が1個検出されている。

遺 物

第16図27～32が出土している。多くが無文であるが、30は口縁部で、32には沈線が確認できる。後期初頭と考えられる。



- 1: 暗褐色土 (やや黄色味をおび、黄色土粒ややまじる)
- 2: 暗褐色土 (黄色土まじり、灰ややまじる)
- 3: 暗褐色土 (暗黄色土、黄色土粒少量まじる)
- 4: 暗褐色土 (黄色味をおび、黄色土粒、石少量まじる)
- 5: カクラン
- 6: カクラン
- 7: 暗褐色土 (黄色味をおび、黄色土粒、灰少量まじる)
- 8: 暗褐色土 (やや黄色味をおび、黄色土粒ややまじる)
- 9: 暗褐色土 (灰、黄色土粒ややまじる)
- 10: 暗褐色土 (やや黄色味をおび、黄色土粒、灰ややまじる)
- 11: 暗黄褐色土 (暗黄色土まじる)
- 12: 暗褐色土 (やや黄色味をおびる)
- 13: 黄色土



- 1: 暗褐色土
- 2: 黄色土
- 3: 暗褐色土 (やや黄色味をおび、黄色土粒少量まじる)
- 4: 暗褐色土 (黄色土粒ややまじる)
- 5: 暗褐色土 (やや黄色味をおび、黄色土粒ややまじる)
- 6: 暗褐色土 (黄色土粒まじる)
- 7: 暗黄褐色土 (黄色土まじる)
- 8: 暗褐色土 (黄色土少量まじる)
- 9: 暗褐色土 (暗黄褐色土まじる)
- 10: 暗褐色土 (暗黄褐色土少量まじる)



第6図 土坑実測図 (3)

第10号土坑 (第5図)

Kc08 13-11 Ba-41付近より出土している。直径約50cm、深さ約60cmを測る、平面円形、断面円筒形の土坑である。覆土は黄色土が混入した暗褐色土が主体である。また、遺構検出面には直径20cmほどの礫が出土している。

遺 物

遺物は出土していない。

第12号土坑 (第8図)

Kc08 13-11 Bb-41付近より出土している。当初は第11号土坑と第12号土坑の重複と考えていたが、調査中に1基となったため、第11号は欠番としている。また第20号土坑とも重複して検出され、礫の出土状況から、第20号土坑に第12号土坑が掘り込まれている様子が伺える。規模は直径約1m、深さ約50cmを測り、平面形態は楕円に近い円形で、断面円筒形を呈する。覆土は黄褐色系の土で、礫が混入している。

遺 物

第16図33-39が出土している。いずれも破片である。磨消縄文が主体を占めることから、後期初頭と考えられる。第14図2・3・7は磨石である。4は凹石である。

第13・14号土坑 (第10図)

この土坑はKc08 13-11 Ba-39付近で検出されている。当初1基の遺構と考えていたが、掘り下げると2基となったため、第13・14号土坑とした。

第13号土坑は、直径約65cm、深さ82cmで平面円形、断面碗形を呈し、遺構検出面から、拳大の礫が集中して出土している。第14号土坑は直径58cm、深さ26cmの平面円形、断面碗形を呈している。

遺 物

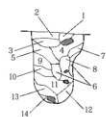
第7図1・2が第13号土坑より出土している。1は波状口縁の破片で、口縁端部に押圧を伴う隆帯を貼り付けている。また、波頂部からも押圧を伴う隆帯を垂下させている。なお、器壁に施文されている沈線は浅く、明瞭とはいえない。2は磨消縄文が見られる。第15図3は磨石である。第13号土坑からの出土である。

第15号土坑 (第10図)

Kc08 13-11 By-38付近より出土している。直径約90cmの卵形を呈し、深さ約24cmの浅い皿形であった。覆土は根によるカクランが激しく、明瞭に把握できなかったが、黄色味を帯びた暗褐色土が主体である。なお、北西部の一部が調査範囲外となっており、全体を検出することができなかった。

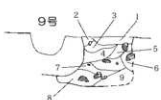
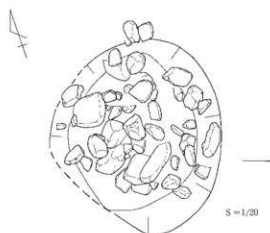


第7図 土坑出土遺物 (1)

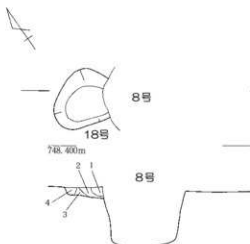


- 1: カクラン
- 2: 暗褐色土 (やや黄色味をおびる)
- 3: 暗褐色土 (やや黄色味をおび、黄色土粒ややまじる)
- 4: 暗褐色土 (黄色土ややまじる)
- 5: 暗褐色土 (褐色味が強く、黄色土少量まじる)
- 6: 黄色土 (暗褐色土多くまじる)
- 7: 黄色土 (暗褐色土まじる)
- 8: 暗褐色土 (硬まじり、黄色土ややまじる)
- 9: 暗褐色土 (褐色味をおび、暗褐色土まじる)
- 10: 暗褐色土 (黄色土粒少量まじる)
- 11: 暗褐色土
- 12: 暗褐色土
- 13: 暗褐色土 (明黄色土少量まじる)
- 14: 暗褐色土 (やや黄色味をおびる)

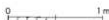
キメの細かい土



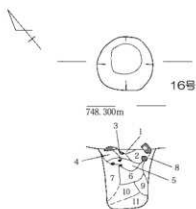
- 1: 暗褐色土 (暗褐色土少量まじる)
- 2: 黄色土 (暗褐色土まじる)
- 3: 暗褐色土 (暗褐色土少量まじる)
- 4: 暗褐色土 (黄色土粒少量まじる)
- 5: 暗褐色土 (褐色味が強く、灰ややまじる)
- 6: 暗褐色土 (褐色味が強く、黄色土粒少量まじる)
- 7: 暗褐色土
- 8: 暗褐色土
- 9: 暗褐色土 (黄色味をおびる)



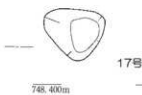
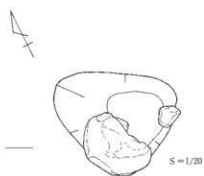
- 1: 暗黄色土 (暗褐色土まじる) - カクラン
- 2: 暗褐色土 (やや黄色味をおびる)
- 3: 暗褐色土 (黄色土粒ややまじる)
- 4: カクラン



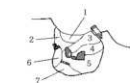
第8図 土坑実測図(4)



- 1: 暗褐色土 (黄色土粒ややまじる, やや黄色味をおびる)
- 2: 暗褐色土 (やや黄味をおびる)
- 3: 暗褐色土 (黄色土粒, 石ややまじる)
- 4: 暗褐色土 (黄色土まじる)
- 5: 暗褐色土 (石少量まじる)
- 6: 暗褐色土 (黄色味をおび, 黄色土粒少量まじる)
- 7: 黄色土 (暗褐色土まじる)
- 8: 暗黄褐色土 (黄色土まじる)
- 9: 黄褐色土 (褐色味が強く, 黄色土粒少量まじる)
- 10: 暗褐色土
- 11: 暗褐色土 (黄色土粒少量まじる)



- 1: 暗褐色土 (やや黄色味をおびる)



- 1: 暗褐色土
- 2: 暗褐色土 (やや黄色味をおび, 黄色土まじる)
- 3: 暗黄褐色土 (黄色土少量まじる)
- 4: 暗褐色土 (暗黄褐色土まじる)
- 5: 暗褐色土 (暗黄褐色土少量まじる)
- 6: 黄色土 (暗褐色土まじる)
- 7: 暗褐色土 (やや黄い)

0 1m

第9図 土坑実測図(5)

遺物

第7図3は縄文地文とし、縦位の沈線を引いている。

第16号土坑（第9図）

Kc08 13-11 Ba-40付近より出土している。直径約60cm、深さ約64cmを測り、平面形態は円形、断面形態は円筒状を呈する。この土坑についても遺構検出面で拳大の礫が検出されている。覆土は黄色味を帯びた暗褐色土及び黄色土を混入した暗褐色土が主体を占めている。

遺物

第15図4・5が出土している。磨石である。

第17号土坑（第9図）

Kc08 13-11 Ba-41付近より出土している。第10号土坑と切り合って出土しているが、前後関係は把握できなかった。直径約60cm×約54cmの平面三角形形状を呈し、深さは約14cmと浅い。なおこの土坑は直径約40cmほどの礫が検出されたことから、遺構と判断して調査したが、土坑として取り扱うのが適当か疑問が残る。

遺物

遺物は出土していない。

第18号土坑（第8図）

Kc08 13-11 Bb-41付近より出土している。第8号土坑を調査中に壁面に落ち込みを確認したことから、発見された遺構である。直径約70cmの平面三角形形状を呈し、深さは約10cmと浅い。

遺物

遺物は出土していない。

第19号土坑（第9図）

Kc08 13-11 Bc-43付近より出土している。直径約54cmの平面円形で、深さ約64cmを測る。当初は集石と判断していたが、下部に土坑が検出されたことから、集石の番号は取り消している。断面はやや袋状に膨らんでいる。遺構検出面に拳大の礫が集中して出土し、覆土中にも礫が出土している。覆土は黄色味を帯びた暗褐色系の土が主体である。

遺物

石器が出土している（第15図1）。磨石である。

第20号土坑（第10図）

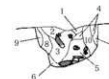
Kc08 13-11 Bb-41付近より出土している。この土坑は第9号土坑及び、第12号土坑と重複して出土しており、東西両壁を削りとりられているため、正確な規模を確認できない。しかし、遺構検出面には拳大の礫が集中しており、覆土は黄色味を帯びた暗褐色系の土で覆われていた。

遺物

遺物は出土していない。



- 1: 暗褐色土 (灰ややまじる)
 2: 暗褐色土 (やや黄色味をおびる)
 3: 暗褐色土 (黄色味をおび、黄色土粒少量まじる)



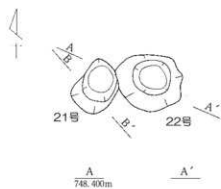
- 1: 暗黄褐色土 (灰少量まじる)
 2: 暗黄褐色土 (灰少量まじる)
 3: 暗褐色土 (黄色味をおび、灰少量まじる)
 4: 暗黄褐色土 (黄色土まじる)
 5: 暗黄褐色土 (灰ややまじり、石少量まじる)
 6: 暗黄褐色土 (黄色土粒多くまじる)
 7: 暗黄褐色土 (黄色土少量まじる)
 8: 暗黄褐色土
 9: 黄色土
 10: カクラン } 13号



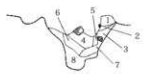
- 1: 暗褐色土
 2: 暗褐色土 (やや黄色味をおび、灰ややまじる)
 3: 暗褐色土 (やや黄色味をおび、灰少量まじる)
 4: 黄色土 (暗褐色土多くまじる)
 5: 黄色土
 6: カクラン



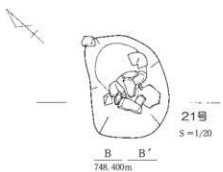
第10図 土坑実測図 (B)



A 748.400m A'



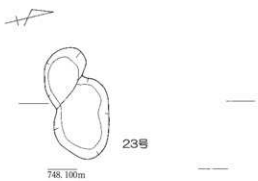
- 1: 暗褐色土 (やや黄色味をおび、黄色土粒少量まじり、炭ややまじる)
- 2: 暗褐色土 (やや黄色味をおび、黄色土まじる)
- 3: 暗褐色土 (黄色土ややまじる)
- 4: 暗褐色土 (やや黄色味をおび、炭、黄色土粒少量まじる)
- 5: 暗黄褐色土 (黄色土粒多くまじる)
- 6: 暗褐色土 (やや黄色味をおび、黄色土まじる)
- 7: 暗褐色土 (やや黄色味をおび、黄色土少量まじる)
- 8: 黄色土 (暗黄色土多くまじる)



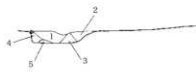
B B' 748.400m



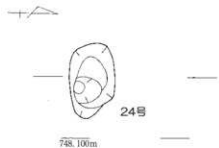
- 9: 暗褐色土 (暗黄色土少量まじる)



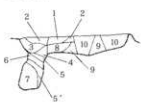
748.100m



- 1: 暗褐色土 (小石ややまじる)
- 2: カクラン
- 3: 暗褐色土
- 4: 暗褐色土 (やや黄味をおびる)
- 5: 黄色土 (地山)



748.100m



- 1: 暗褐色土 (黄土まじる)
- 2: 暗褐色土
- 3: 暗褐色土 (暗黄褐色土との混合土)
- 4: 暗黄色土 (暗黄褐色土まじる)
- 5: 暗褐色土 (黄色土粒少量まじる)
- 5': 暗褐色土 (黄色土粒ややまじる)
- 6: 黄色土
- 7: 暗黄褐色土 (礫まじる)
- 8: 暗黄色土
- 9: 暗黄色土 (暗黄褐色土まじる)
- 10: カクラン



第11図 土坑実測図 (7)

第21号土坑（第11図）

Kc08 13-11 Bb-40付近より出土している。55cm×40cmの長方形を呈し、深さは約40cmを測る。断面形態は不整形であった。遺構検出面では拳大の礫が集中して検出されていたため、当初は第4号集石としていたが、下部に土坑が検出されたため、土坑とした。

遺 物

第7図4・5が出土している。4は磨消縄文が施文され、5には沈線が見られる。

第22号土坑（第11図）

Kc08 13-11 Bb-40付近より、第21号土坑と接して出土している。直径約60cmの不整形円形である。深さは最深部で60cmを測るが断面形態は不整形である。覆土は黄色土粒の混入した暗褐色系の土が主体であった。

遺 物

遺物は出土していない。

第23号土坑（第11図）

Kc08 3-11 At-37付近より出土している。遺構検出時には1基の土坑と判断していたが、調査途中で2基と判明した。このため、遺構番号を分ける事ができず、一括して第23号土坑として掲載している。第23号（東）土坑は90cm×60cmの不整形な長方形を呈し、深さは約15cmであった。また第23号（西）土坑は現存する部分で、直径60cm×40cmの楕円形と考えられる。深さは約17cmであった。

遺 物

第7図6・7が出土している。

第24号土坑（第11図）

Kc08 13-11 Au-36付近より出土している。70cm×50cmの隅丸長方形を呈すると考えられる。土坑南部にはピットが重複して検出されているが、時期は明確にできない。また土層断面の観察によると、カクランによって北部壁が破壊されている様子が観察される。

遺 物

遺物は出土していない。

第25号土坑（第12図）

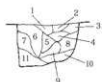
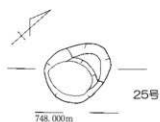
Kc08 13-11 At-36付近より出土している。直径約60cmの不整形円形を呈し、深さは約40cmを測る。断面は箱形であった。覆土は黄色土粒の混入した暗褐色土が主体であった。

遺 物

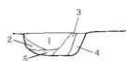
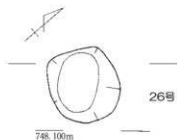
遺物は出土していない。

第26号土坑（第12図）

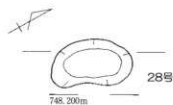
Kc08 13-11 At-35付近より出土している。直径約80cmのやや不整形な円形を呈し、深さは約25cmを測る。断面碗形の土坑である。覆土は黄色味を帯びた暗褐色系の土が主体であった。



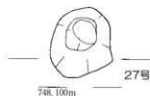
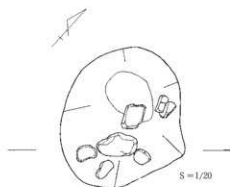
- 1: 暗黄褐色土 (黄色小粒少量まじる, 黄色味をおびる)
- 2: 暗褐色土 (黄色味をおびる)
- 3: 暗褐色土 (黄色土まじる)
- 4: 暗褐色土
- 5: 暗黄褐色土
- 6: 暗黄褐色土 (黄色土ややまじる)
- 7: 暗黄褐色土 (黄色土少量まじる)
- 8: 暗褐色土 (黄色土ややまじる)
- 9: 暗褐色土 (やや黄色味をおびる)
- 10: 暗褐色土 (やや黄色味をおび, 黄色土まじる)
- 11: 暗褐色土 (黄色土少量まじる)



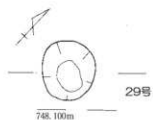
- 1: 暗黄褐色土 (黄色土ややまじる)
- 2: 暗褐色土 (暗黄褐色土との混合土)
- 3: カクツシ
- 4: 暗黄褐色土 (黄色土まじる)
- 5: 黄色土 (暗黄褐色土まじる)



- 1: 暗褐色土 (暗黄褐色土多くまじる)
- 2: 暗褐色土
- 3: 黄色土 (塵多まじる)
- 4: 暗褐色土 (暗黄褐色土少量まじる)
- 5: 暗褐色土 (塵少量まじる)
- 6: 暗黄褐色土



- 1: 暗黄褐色土
- 2: 暗黄色土 (暗褐色土まじる, 塵まじる)
- 3: 暗黄色土 (暗褐色土少量まじる)
- 4: 暗褐色土



- 1: 暗褐色土 (やや黄色味をおびる)
- 2: 暗褐色土
- 3: 暗黄褐色土 (暗褐色土まじる)



第12図 土坑実測図 (8)

遺 物

遺物は出土していない。

第27号土坑 (第12図)

Kc08 13-11 Au-35付近より出土している。80cm×60cmの不整形な楕円形で、深さは最深部で約30cmを測る。底部は平坦ではなく、一部にテラス状の段差が見られる。

遺 物

遺物は出土していない。

第28号土坑 (第12図)

Kc08 3-11 Av-36付近より出土している。平面形態は90cm×40cmの不整形な楕円形を呈し、断面は深さ約50cmの箱型であった。覆土は黄色味を若干帯びた暗褐色系の土が主体であった。

遺 物

遺物は出土していない。

第29号土坑 (第12図)

Kc08 3-11 Av-35付近より出土している。直径約60cmの円形で、深さ約20cmの断面碗形を呈している。

遺 物

遺物は出土していない。

第30号土坑 (第13図)

Kc08 3-11 Bc-42付近より出土している。遺構検出面を中心に礫が出土しているため、集石としていたが、下部に土坑が検出されたので、土坑としている。

土坑の規模は、直径約84cmの平面三角形で、深さは約36cmを測る。なお、掘り込み内からは少量の礫が出土している。覆土は黄色味を帯びた暗褐色土が主体を占めている。

遺 物

第14図6が出土している。磨石である。

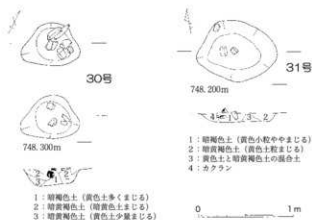
第31号土坑 (第13図)

Kc08 13-11 Ba-40付近より出土している。遺構検出面から礫が出土したため、集石と判断したが、礫の出土量が少なく、下部に土坑が検出されたため、土坑とした。

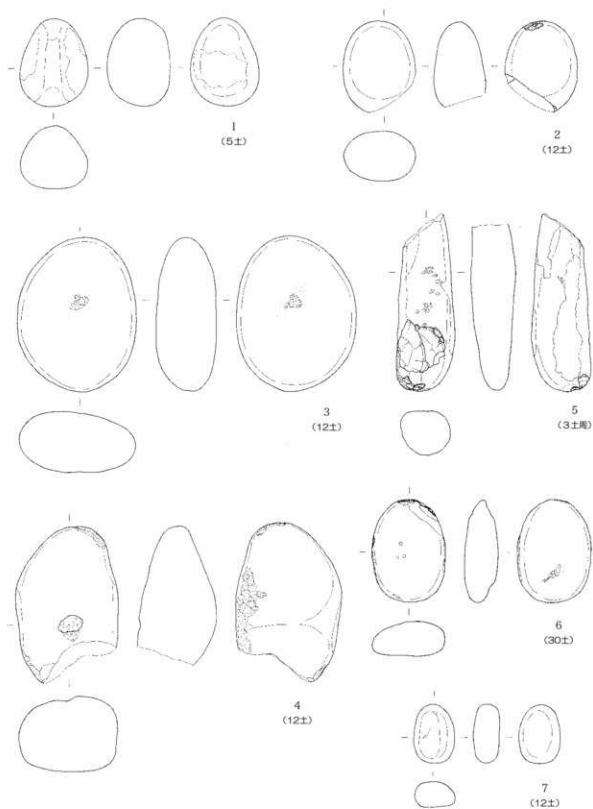
長径約90cm、短径約64cmの楕円形を呈する。深さは約10cmであった。

遺 物

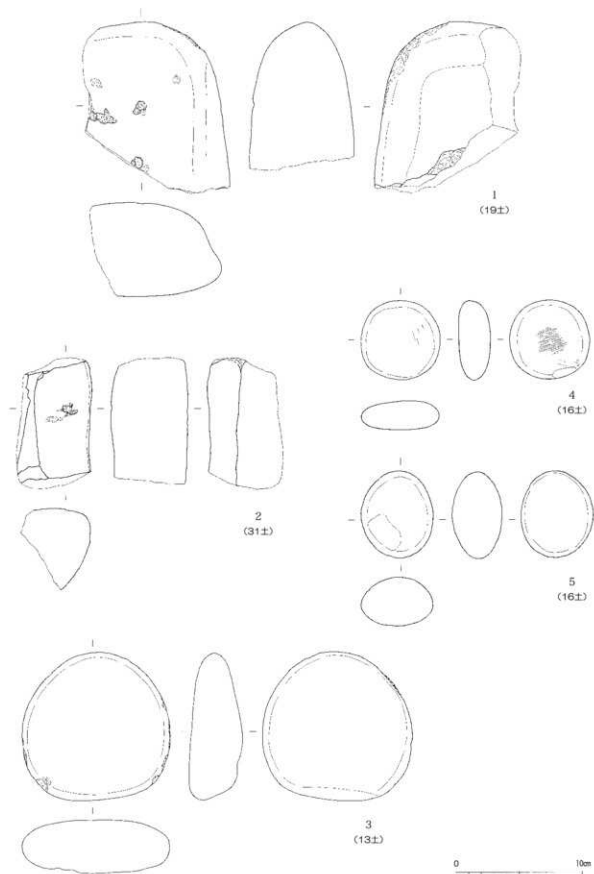
第15図2が出土している。磨石である。



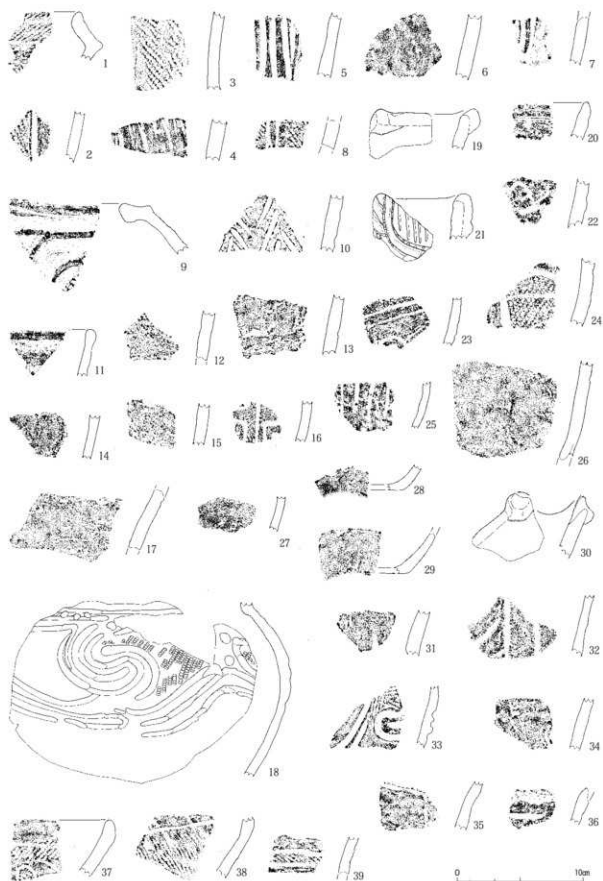
第13図 土坑実測図 (9)



第14図 土坑出土遺物 (2)



第15圖 土坑出土遺物 (3)



第16圖 土坑出土遺物(4)

2. 埋 甕

Kc08 13-11 Be-43より出土している。当初は住居址の存在を疑ったが、硬化面等を性格に把握できなかったため、埋甕とした。周囲には礫が散乱した状態で検出されており、口縁部は欠損し、体部下部も欠損していた。なお、掘り方下部には深鉢を支えるかのように扁平な石が敷かれていた。

遺 物 (第19図)

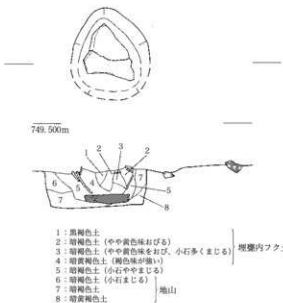
埋甕として使用されていた土器は、焼成は良好であったものの、欠損部が多く、器形をすべて復元できるものではなかった。器面はほとんどが無文であったが、一帯の縄文が縦位に施文されていた。



3. ピ ッ ト

ピットはPit 1、Pit 2 以外はすべてKc08 13-11 B c-41付近の土坑と重複している。いずれも直径20cm前後で、深さも10cm～20cm前後と比較的浅い。

なお、Pit 1 からは蔽石が出土している (第20図)。



4. 礫 群

礫群は3層に分けて調査を実施している。この内、南西部の礫については地山の礫及び、マウンドと考えられた。また、調査区の南東半部では小石程度の礫が集中し、特にAw-38付近では小形の礫の周囲に大型

の礫がそれらを囲うかの様に検出されたことから、当初は遺構かと判断していたが、調査が進行する中で、地山の石及び大城山麓の押し出しである事が判明し、調査対象から除外している。

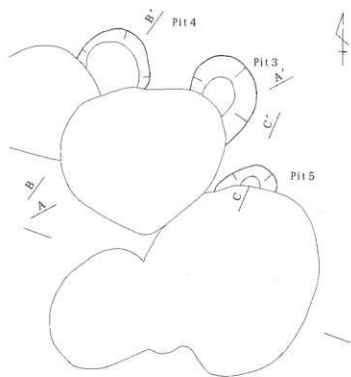
また、全体的にこの調査区では角礫が多数を占め、押し出しによる礫と考えられたため、平面図の作成のみにとどめている。

なお、Av-40付近では礫が列状をなして出土していたが、一部であったため、性格を明確にできなかった。

遺 物

第21図1・2は打製石斧である。長さ約10cmで、いずれも一方の肩に抉れが見られる。第21図3・4・8は直径10cmほどの中型の円形または楕円形の磨石である。3の裏面はツヤのある様な顕著な磨耗痕が観察された。第21図5～7は円形または楕円形を呈している、直径6cm程度の小型の磨石である。いずれの石器も顕著な磨

第17図 埋甕実測図



A
748.200m



- 1: 暗褐色土
2: 暗黄褐色土

B
748.200m



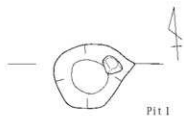
- 1: 暗褐色土 (黄色味をおびる)
2: 暗褐色土 (黄色味をおび、黄色土まじる)
3: 暗黄褐色土 (黄色土まじる)

B'

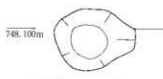
C
748.200m



- 1: 暗褐色土



Pit 1



- 1: 暗黄褐色土 (黄色土、暗褐色土多くまじる)
2: 暗褐色土
3: 暗黄褐色土 (暗黄褐色土まじる)
4: 暗黄褐色土 (黄色味をおび、黄色土粒多くまじる)
5: カクラン (種)



Pit 2

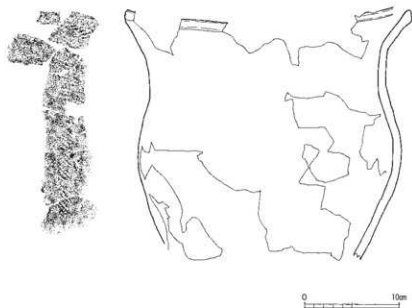


- 1: 暗褐色土 (やや黄色味をおび、黄色土粒まじる)
2: 暗黄褐色土
3: 暗褐色土
4: 暗黄褐色土 (黄色土まじる)

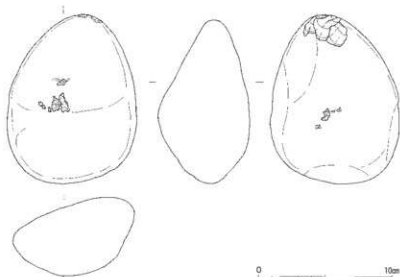
0 50m

第18図 ビット実測図

耗痕が認められる。また、6には緑辺部に打撃痕も見られる。第22図1～3は三角形をした磨石である。長辺約9cmを測り、頂点の一箇所が欠損している。また、器面中央部には敲打状の浅い窪みが観察される。第22図5・6、第23図1～3は直径13cm前後の比較的大きな磨石である。楕円形が中心であるが、第23図3はやや多角形状の形態を呈している。第23図4・5、第24図2～6は棒状の形態をした凹石である。上部と下部、中心部より若干上下にずれた箇所3箇所に使用痕が確認されている。使用痕は敲打状に浅い箇所と深い窪みがある。これらの石器は欠損している物が多い。いずれも中央部付近を中心に比較的浅い窪みが確認できる。第25図1～5、第26図1・2は欠損した磨石である。これらの欠損が使用時に生じたのか、何らかの理由によって欠損した石を使用したのかは明確にはできなかった。第25図8は凹石である。

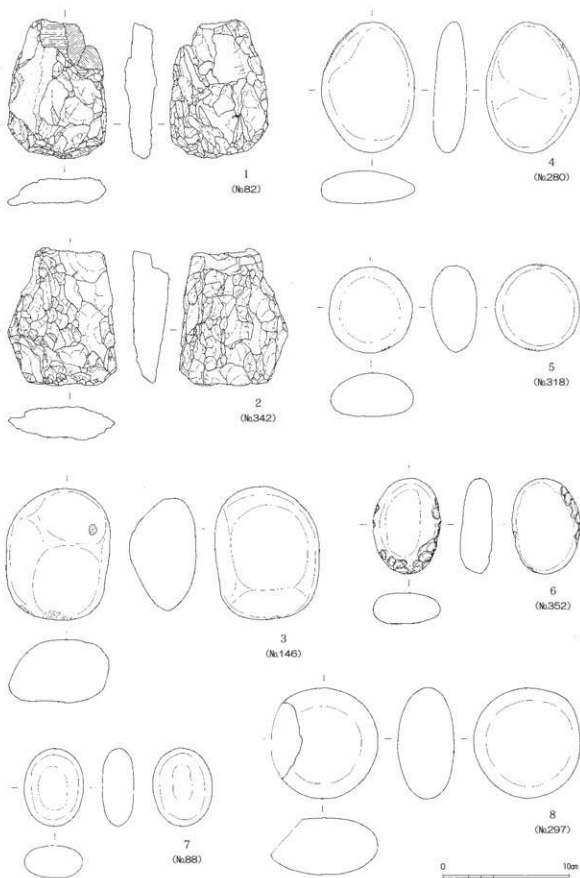


第19図 埋喪出土遺物

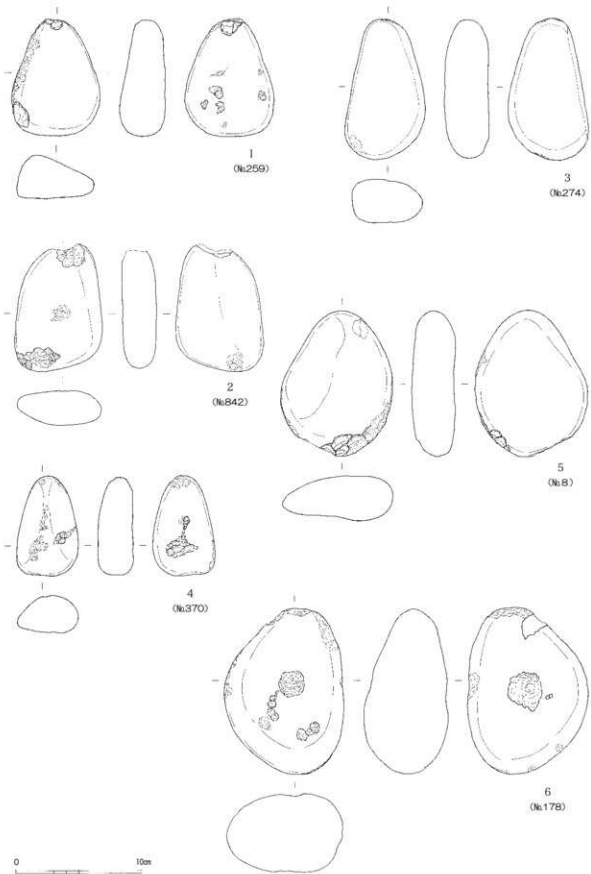


第20図 ビット出土遺物

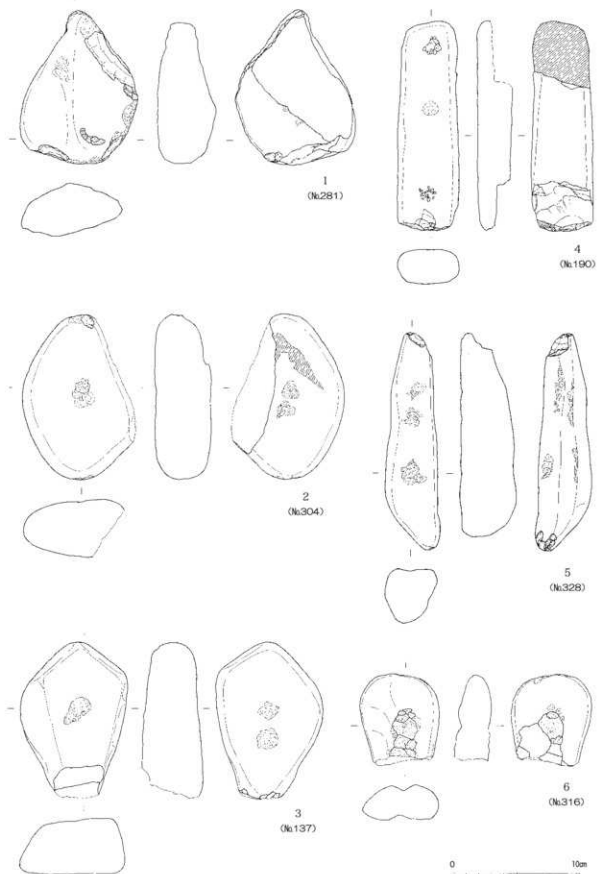
深い窪みが見られる。第26図3は不整形な凹石である。図の上部に欠損部があることから、三角形の形態を呈する磨石に分類できる可能性もある。第25図6・7、第26図3～7、第27図は硬砂岩系の石を使用している石器である。第26図4・6・7は四角形の形態をし、敲打状の窪みが見られる。また6・7には顕著な磨耗痕が確認できる。第26図5は三角形の形態をし、頂点の一箇所が欠損している。第27図1・2は円形もしくは楕円形を呈する直径9cm程度の中型の磨石である。両者共に顕著な磨耗痕が確認できるが、断面形態からすると磨石とは異なる性格の石器の可能性も考えられる。第27図3・4は直径13cm程の大型の磨石である。表面に敲打状の浅い窪みが見られる。第27図5は四角形を呈する大型の磨石である。中心部付近には敲打状の浅い窪みが見られる。第27図6は棒状の石器である。やや深い窪みが端部付近に確認できる。第28図1～3は大型の磨石である。いずれも欠損している。また、2は表裏共に顕著に使用されている。第28図4は砥石である。中心部に筋状の浅い窪みが確認できる。



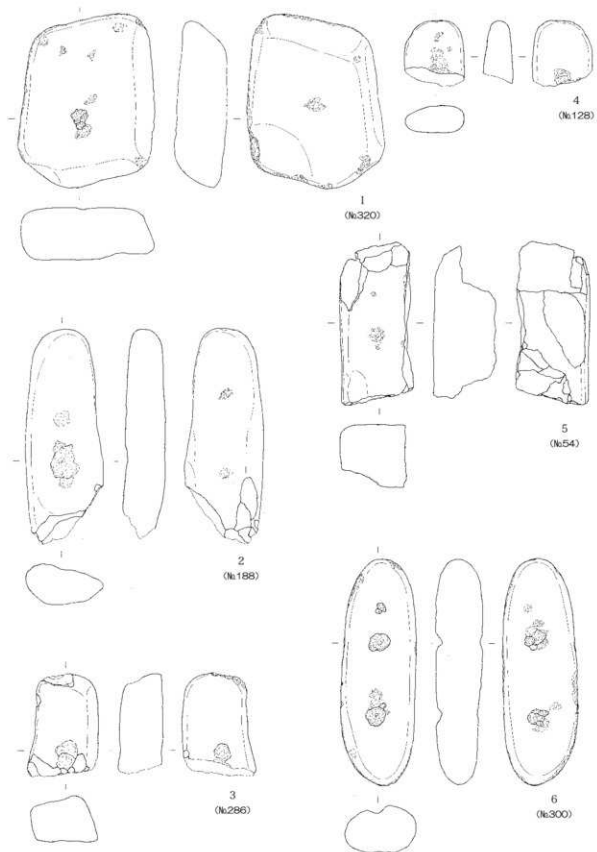
第21圖 礫群出土遺物 (I)



第22圖 螺群出土遺物 (2)

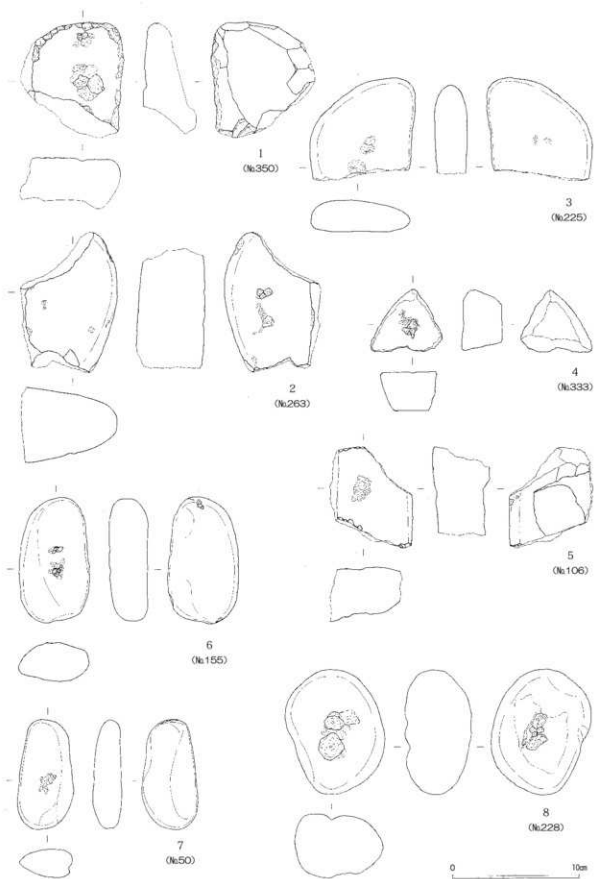


第23図 塚群出土遺物 (3)

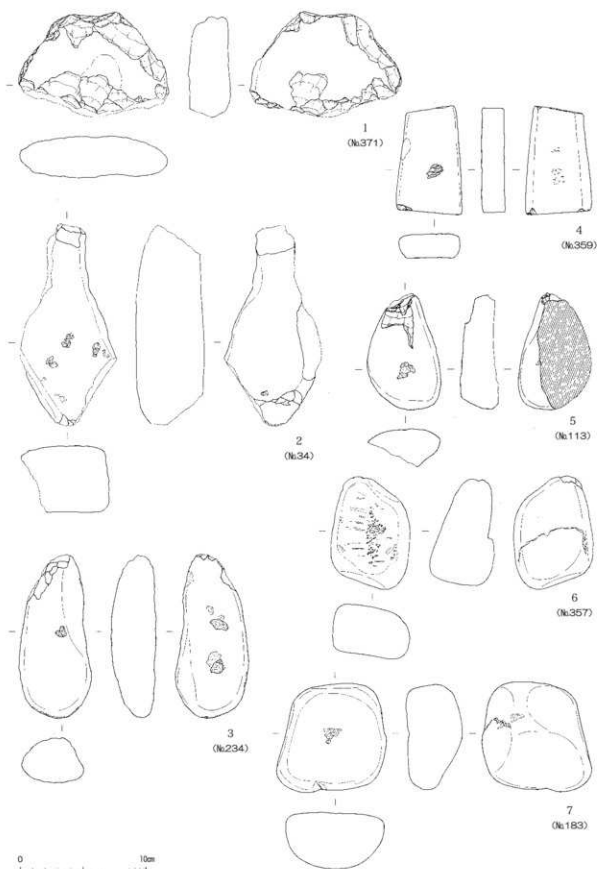


0 10cm

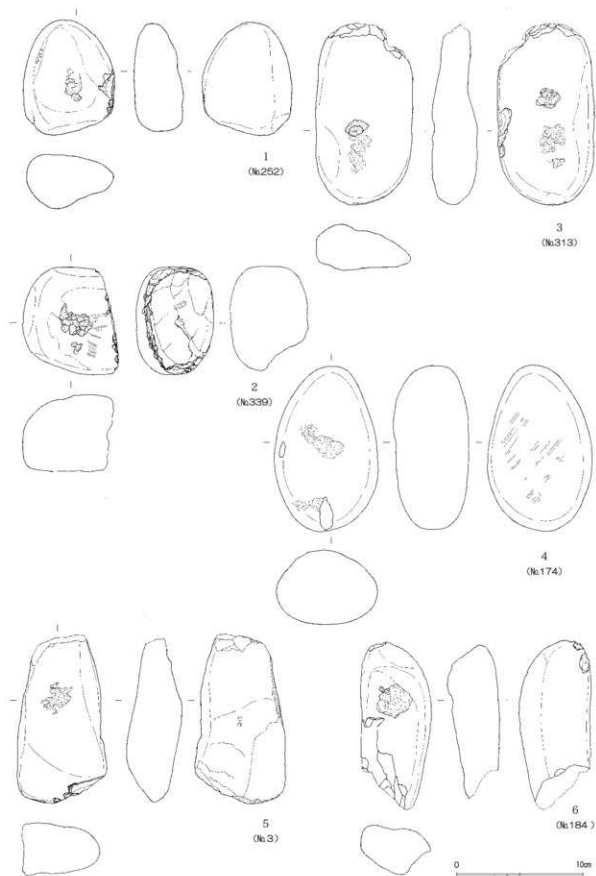
第24圖 塚群出土遺物 (4)



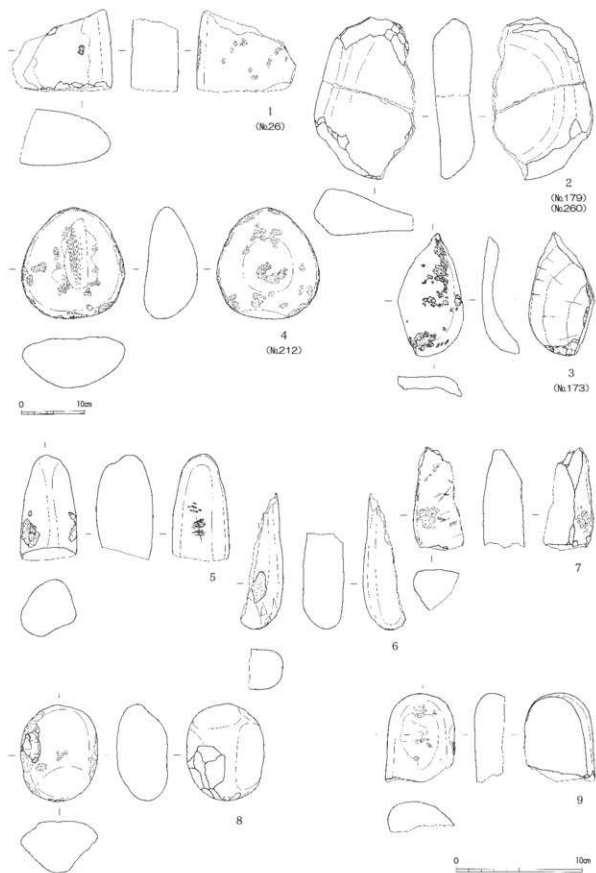
第25図 螺群出土遺物 (5)



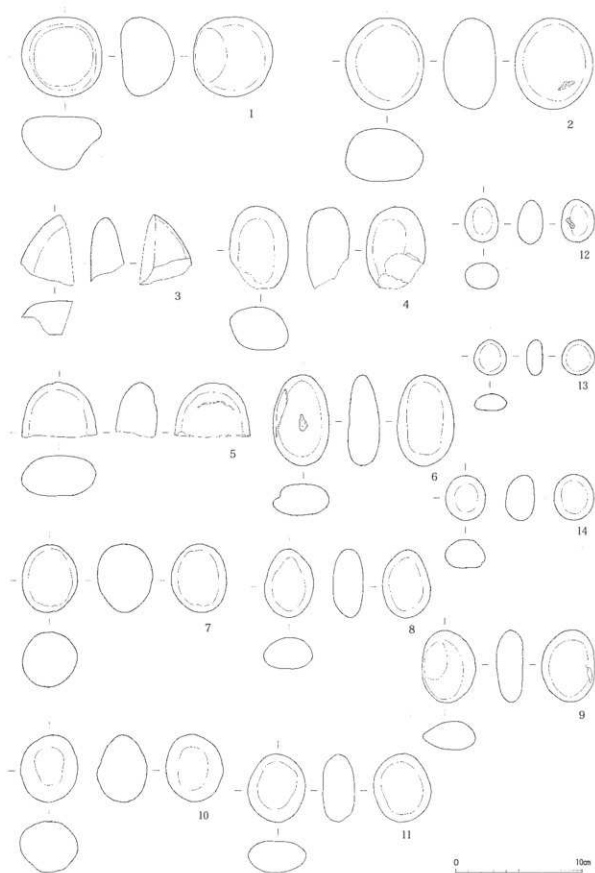
第26図 礫群出土遺物 (C)



第27圖 磯群出土遺物(7)



第28図 確群・遺構外出土遺物 (1~4: S=1/6)



第29図 遺構外出土遺物



第30图 第8号土坑、遺構外出土遺物(1:第8号土坑)

第V章 まとめ

今回の調査では、羽場崎遺跡の分布範囲のほぼ中央部を、段丘に直交して調査した形となった。

西天竜水路は昭和3年にすべてが開削され、伊那市以北の水田に供給されているが、上辰野のサイフォンは大正14年に建設され、今日まで西山の水田約100haを潤し続けている。

開削当時の写真を見ると、開渠で取水口を建設しており、段丘を大きく掘り込んでいるというよりも、谷地形を選定して地点を決定している様子が見える。

遺跡の状況を見ると濁沢が台風23号等の豪雨により、あふれんばかりの沢水をたたえ、工事現場を襲っていた状況もこの地点に谷地形があり、土砂が大城山から供給されていた事を物語っている。

地元の人の話でも、この沢から土砂が数回押し出され、石榿も出土している事が証言され、断面観察でもその状況が把握できている。

このような谷を挟んで南東部には縄文時代中期後葉から後期前半期にわたる集落址が出土し、北西部でも、縄文時代中期後葉の住居址の出土が確認されている。

今回調査を実施した地点は谷の北西部に当たり、礫が散在している状況であった。礫は直径50cm程度から拳大まで様々であり、しかも角礫が中心であることから、これらの礫は大城山からの押し出しによる物がほとんどであると考えられる。このような礫はサイフォン北西部でも確認されており、一時期大きな土砂の押し出しが発生した事が想像できる。

これらの礫に対して、地山面には列石の一部かと考えられる遺構が出土している。しかし、かつてのサイフォン工事によって多くを破壊されているようで、その性格を明確に把握することはできなかった。

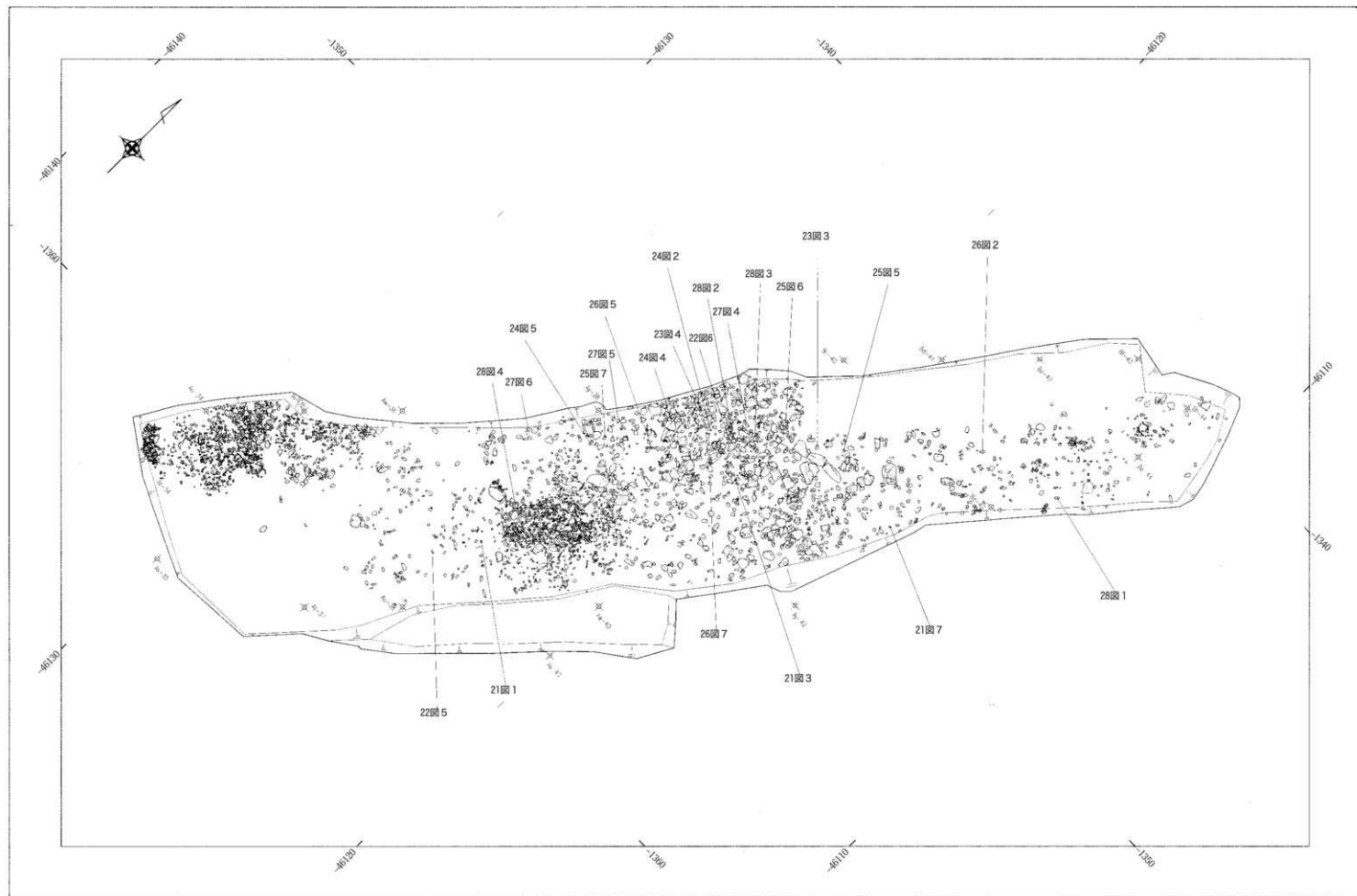
また今回出土した遺物は、そのほとんどが石器であり、しかも磨石が多くを占めていると考えられる。磨石は三角形、四角形、円形などある程度形態別に分類が可能と考えられ、しかも形状によって窪みの深さや欠損部の部位等に、ある程度の共通性が見え、機能に差異があったことが傾向としてとらえられようである。今後更に検討していかなくてはならない。

また、地山面では、縄文時代後期と考えられる土坑が出土している。これらは直径が50cmのものが多く、深さも60cm前後と小型の土坑であった。また直径1m前後の土坑も出土しているが、この土坑では礫が混入しているほか、深鉢が伏せた状態で出土している。

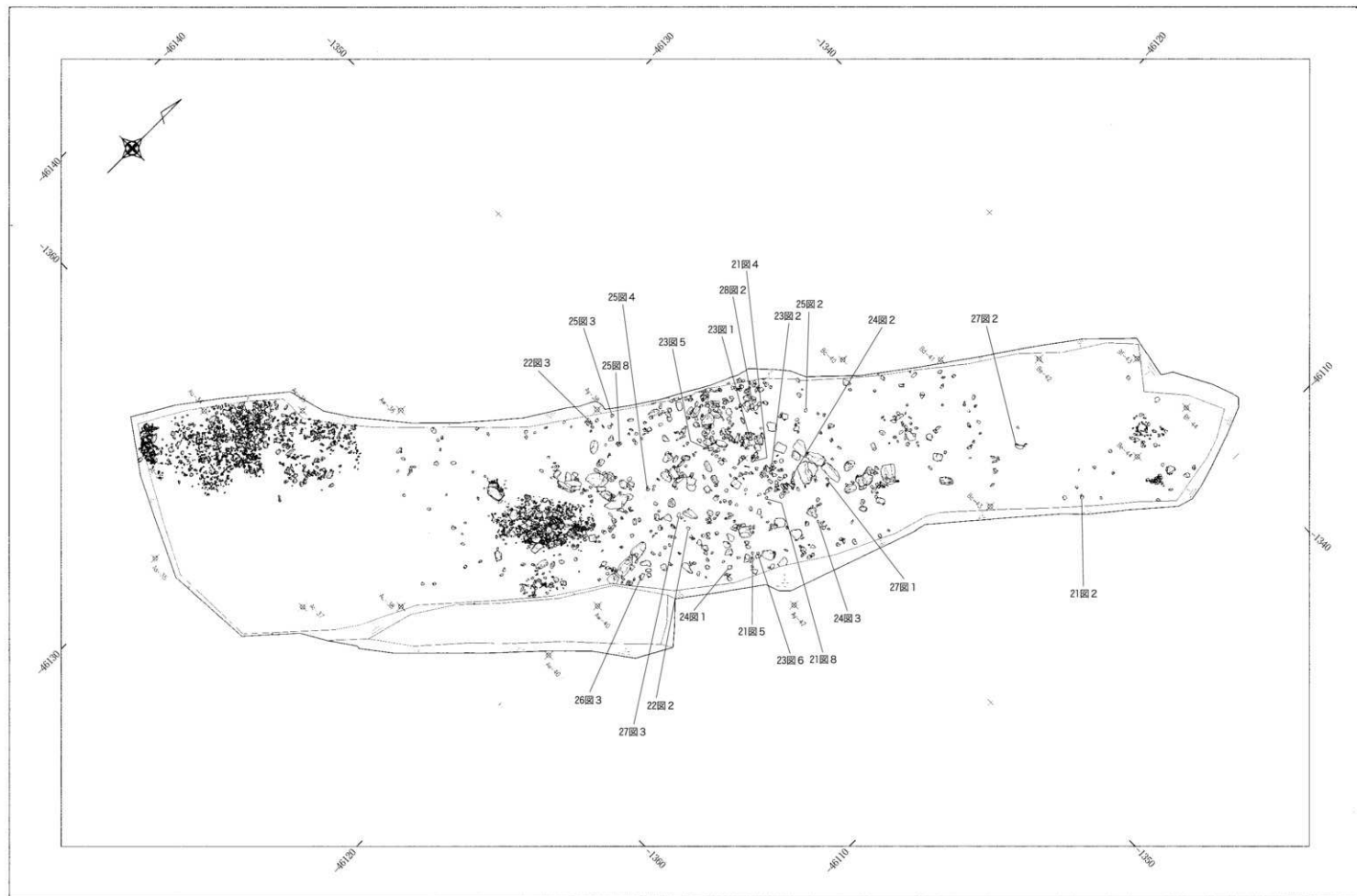
小型の土坑は遺構検出段階で拳大以下の石が集中して検出されている。また、ある程度重複しながら数箇所にもまとめて検出されているといった特徴が指摘できよう。

今回の調査は小規模であり、縄文時代後期の羽場崎遺跡の様相を解明するには資料不足が否めない。今後町道の建設に先立って実施されている発掘調査の成果を踏まえて再度考えていきたいと考えている。

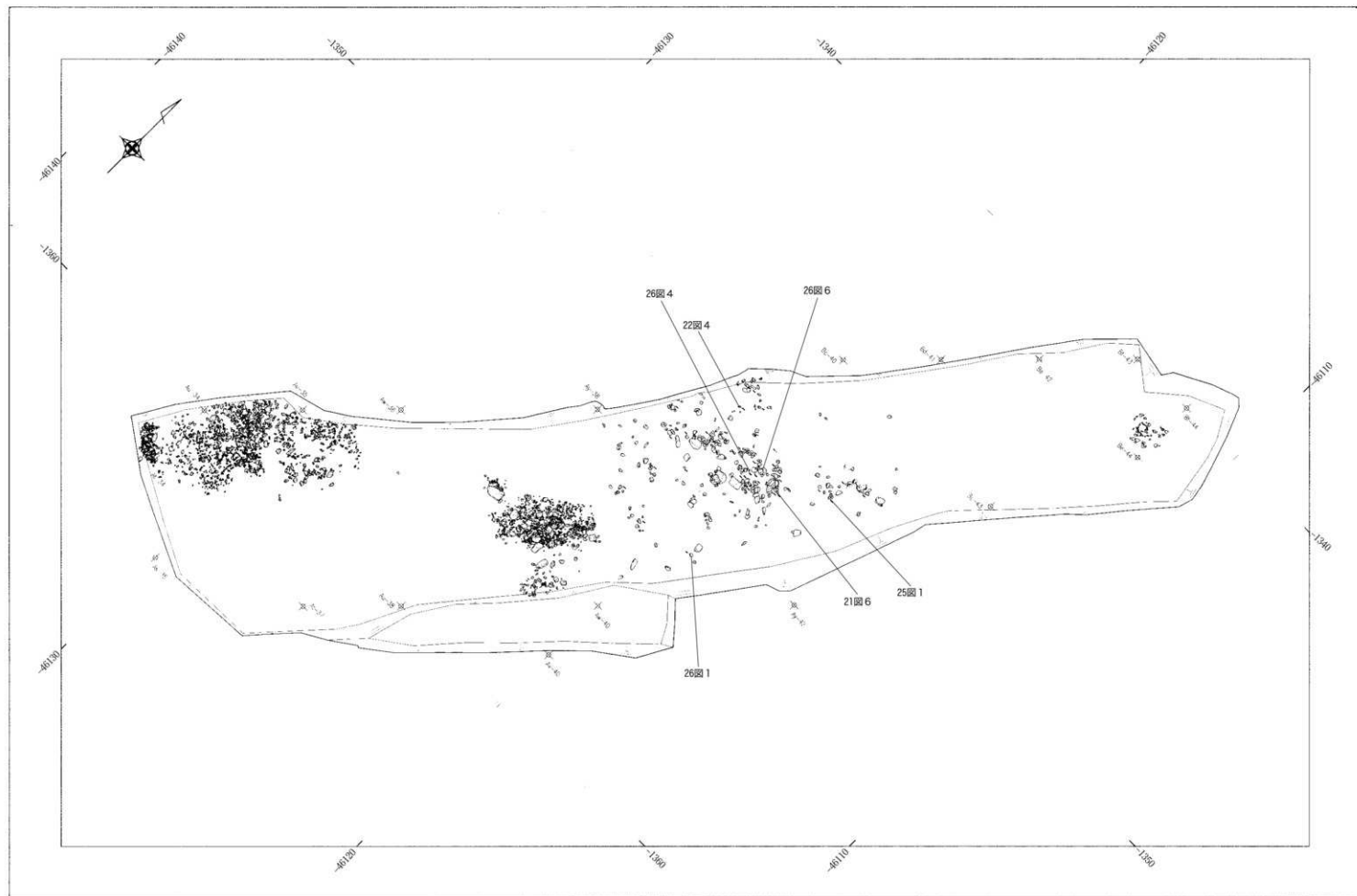
最後に、礫の多量の出土により、重機による表土剥ぎがほとんどできず、手掘りによって地山まで調査を行って頂いた作業員の皆さんをはじめ、調査に携わって頂いた皆さんに篤く御礼申し上げます。



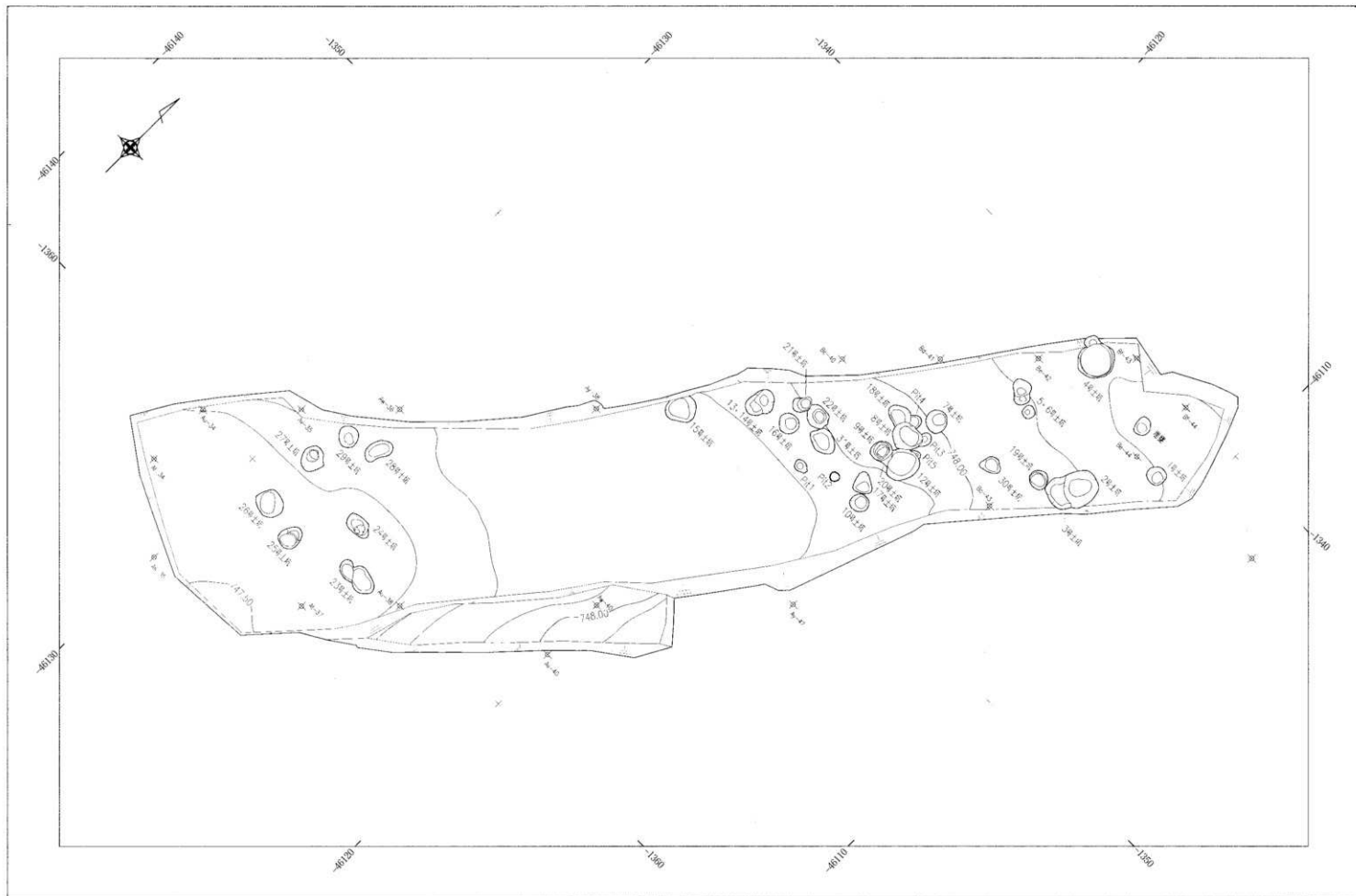
第31図 第1層全体測量図 (S=1/100)



第32図 第2層全体測量図 (S=1/100)



第33图 第3层全体测量图 (S=1/100)



第34图 第4层全体测量图 (S=1/100)

— 写真图版 —



全体写真 (1)



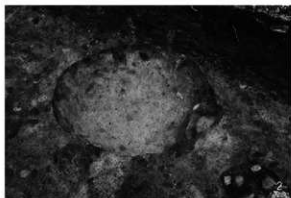
全体写真 (2)



调查区风景 (1: 埋群第1层、2: 埋群第2层、3·4: 第3层)



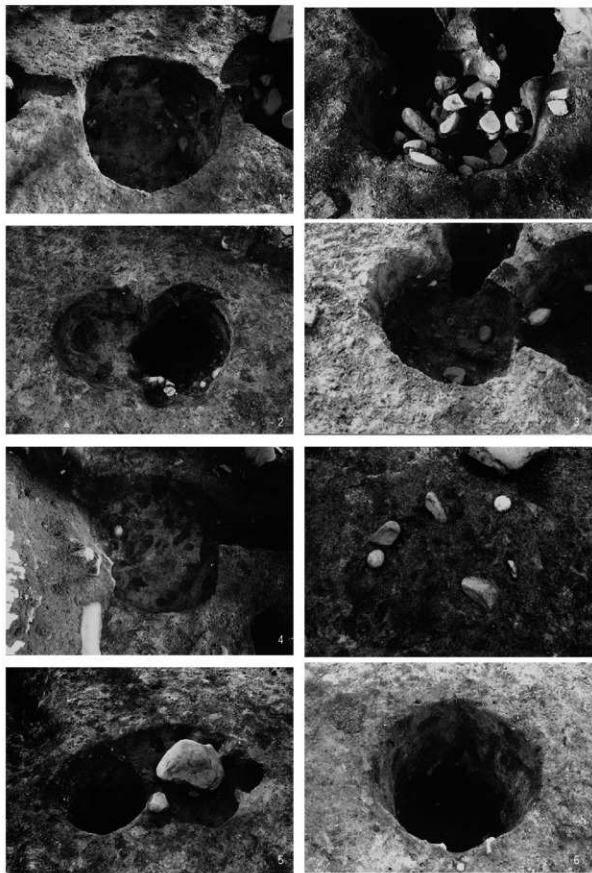
土坑群



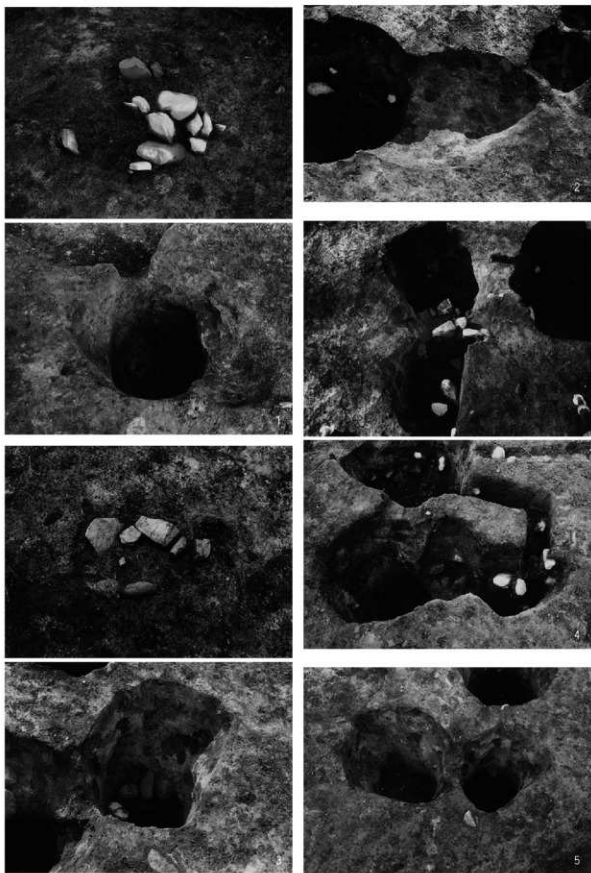
土坑 (1) (1: 1号、2: 2号、3: 3号)



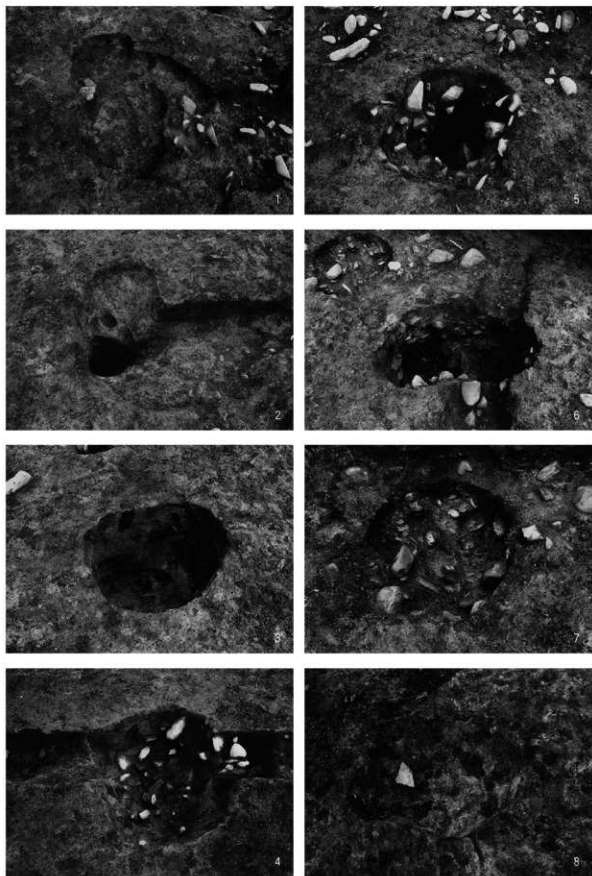
土坑 ② (1: 4号、2: 5·6号、3: 7号、4: 9号、5: 10号)



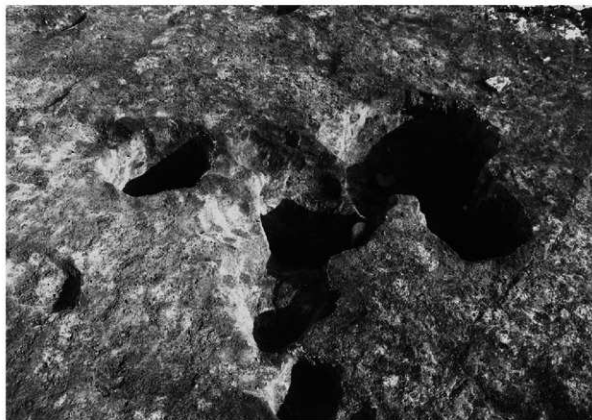
土坑 ③ (1 : 8号、2 : 13·14号、3 : 12号、4 : 15号、5 : 10·17号、6 : 16号)



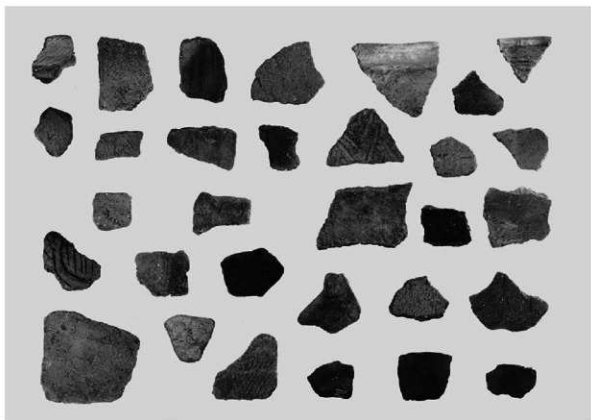
土坑 (1: 19号、2: 18号、3: 21号、4: 9·12·20号、5: 21·22号)



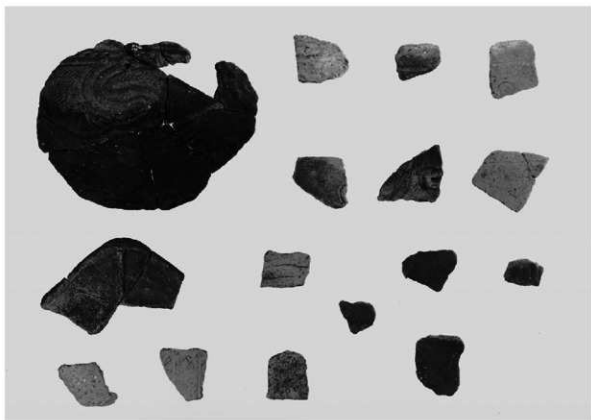
土坑 ⑤ (1:23号、2:24号、3:25号、4:26号、5:27号、6:28号、7:29号、8:31号)



土坑および埋葬（1：30号、2：埋葬）



土坑出土遺物 (1)



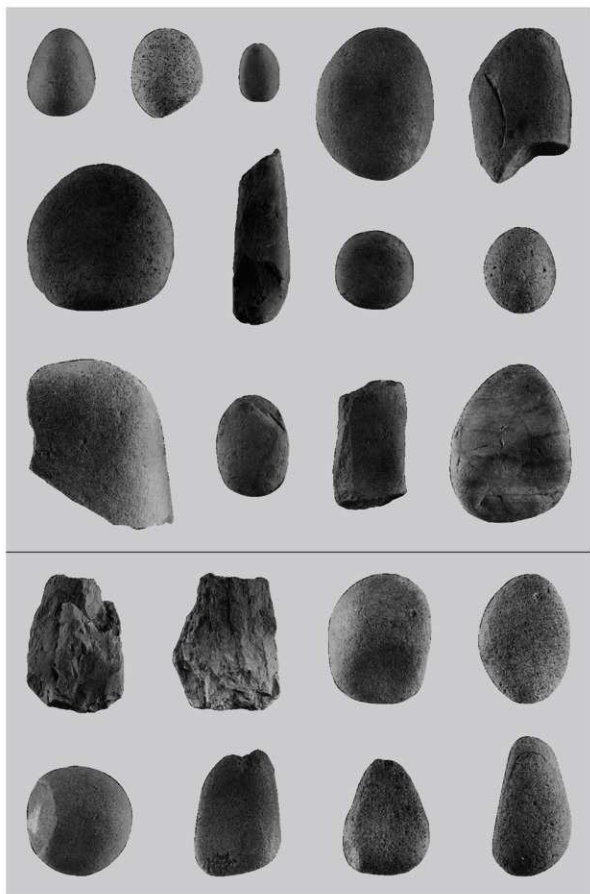
土坑出土遺物 (2)



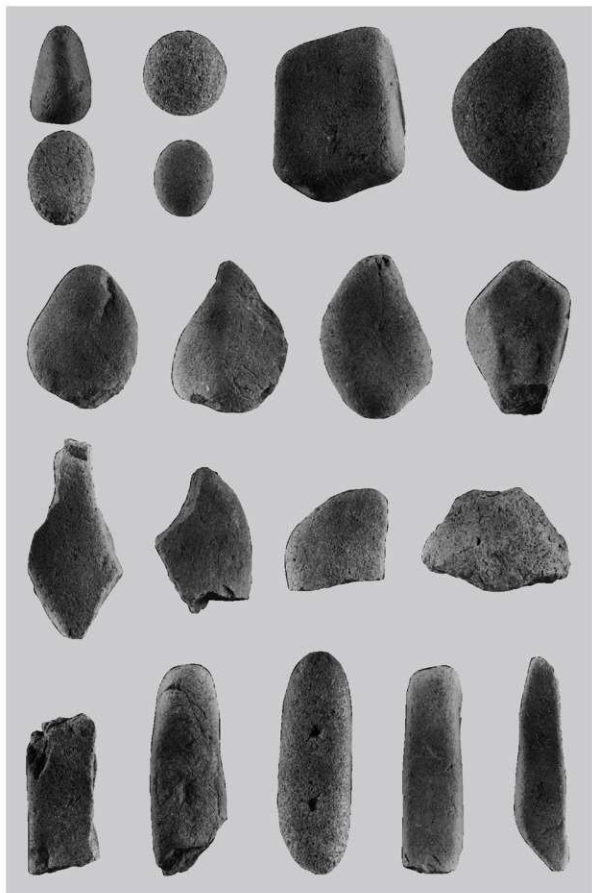
第3号土坑出土土器



埋 亮



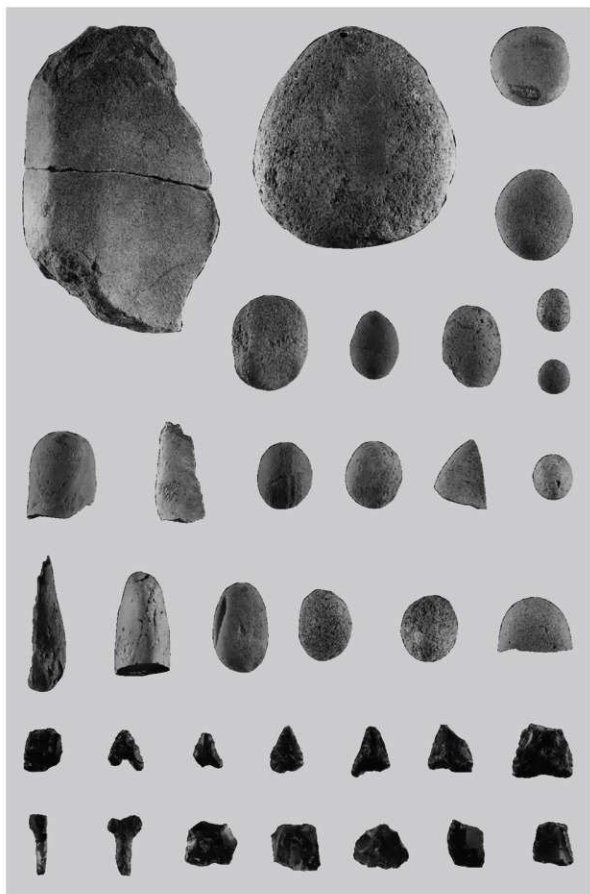
土坑（上段）および雑群（下段）出土石器 (I)



濠群出土石器 (1)



濠群出土石器 ②



土坑および雑群出土石器 ②

報告書抄録

ふりがな	はばざきいせき						
書名	羽場崎遺跡						
副書名	県営かんがい排水事業西天竜宮所地区サイホン工事に先立つ緊急発掘調査報告書						
著者名	福島 水						
編集機関	辰野町教育委員会						
所在地	長野県上伊那郡辰野町中央1番地 電話 (0266) 41-1111						
発行年月日	2005年2月28日						
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積
		市町村	遺跡番号				
はばざきいせき 羽場崎遺跡	長野県上伊那郡 辰野町大字辰野 字堀上489番地 1・3・4	20382	111	35°59'12"	137°59'19"	20030911 / 20040116	180㎡
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		
羽場崎遺跡	墓域	縄文時代	土坑 礫群	31 1	縄文時代後期前半土器・石器		
特記事項	<p>縄文時代後期前半の土壌墓を中心に出土した。 上層には礫群が検出されたが、周辺の状況から、大城山から押し出された礫が中心で、その中に遺構と考えられる礫が散見されたが、詳細を把握することができなかった。</p>						

羽場崎遺跡発掘調査報告書

県営かんがい排水事業西天竜宮所地区
サイホン工事に先立つ緊急発掘調査報告書

平成17年2月28日 発行

編集 辰野町教育委員会
発行 長野県上伊那郡辰野町中央1番地

印刷 ほおずき書籍株式会社
長野県長野市柳原2133-5
☎ (026) 244-0235(代)

